
ハリー・ポッターの弟は母親似

かんと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリー・ポッターの弟は母親似

【NZコード】

N1994V

【作者名】

かんと

【あらすじ】

神の手違いで死んでしまった主人公はチート能力を授かる。けれど転生先はハリー・ポッターの世界。ただのチート能力で大丈夫なのか?

そんなハリー・ポッターの弟が魔法世界で頑張るお話。
ハリー・ポッターの弟は転生者から改題しました。

プロローグ（前書き）

ハリポタ最後の映画を見て感動して書き始めました。
更新は不定期になるとおもいますが見てくださいと嬉しいです。

プロローグ

「うむ、いいだ?

天界じやよ。

展開?

いわゆる神様のいる世界じやよ。

おく。

なんでいい俺いんの?

死んだからじや。

何故?

儂が御主の寿命と他の奴の寿命を間違つて操作してしまったからじ
や。

本来なら後70年は生きれたが。

ところとむ…… 86?

そんなもんじや。

まあ、死んだもんは仕方ないし、どうしようもできないんだが?

そうじや。

それで普通に死んだり輪廻転生とか言つやつで、転生するんだがつへ
ミジンコとか、ミジンコとか、ミジンコとか。

そんな所じや。

俺の場合は？

御主には70年分の何かブレゼントするためにここに来てしまつた。

ちょっと待て。

お前のせいで早く死んだのに、慰謝料はないのか？
70年分は少なすぎるんじやないのか？

分かつてある。

まずは何が欲しいか聞いてからこいつか。

それって転生したときに使えるつてこと？

そつじや。

それじゃあ、まず俺つてどうして転生するの？

ハリー・ポッターの世界じや。

原作時期と同じじやな。

といつより、ハリーの双子の弟じや。

多世界解釈でFA？

FA。

じゃあ、音使い。

零崎曲識さんの能力を十全に使わせて。
作曲とかの才能センス付きで。

他には？

曲弦師。

姫ちゃんの能力をこれまた、十全に使えるようことで、才能センス付きで。

まだ大丈夫じやぞ。

人間以外の生き物、ヴィーラみたいに意思があつて、しゃべれるのも対象に含んで、懐かれるようにして。
あとしゃべれるように。

まあ、幻獣使いみたいな感じ？

厳密に言うと違うけど。

あと一つくらいかの。

じゃあ、箱庭に幻獣入れて頂戴。
フェニックスとかバジリスクとか白面金毛九尾の狐とか。
できればペンダントにして。
べつに中には入らないから。
動物の保管庫みたいな感じだな。

あと一年分余つておつてあるがどうする?
そこまで大層な願いはできんぞ。

ハーマイオニーが少し気になる程度。

セブルスを疑うのをためらう程度。

を深層心理に入れて、記憶は引き継がない。
そのかわり能力は使えるようだ。

記憶はなくていいのか？

俺と知ってる話と異なるだろ？

弟なんてハリーにはいなかつたし。

だからあつても無駄だし、俺つて死んだんだよね？

そうじや。

なら俺の死つて何なんだろうね。

能力貰つて記憶持つたまま転生して、それつて前の俺とは違つどう？

それに残りの寿命分の能力だよな？

貰つたら寿命使つてるから死んでると一緒にやん。

まあ、慰謝料で記憶引き継ぎしてもいいかもしけないけど俺が納得いかないんだよ。

俺は死んだ。

ハリーの双子の弟になつた俺は何故か能力を持つたラッキーな子。
それでいいんだよ。

そういうもんかの～。

それと、魔法の世界なのに魔法はいいのか？

プロのプレイヤーの技術を原作以上に使えれば何ら問題ない。

そつそつ、先に言つた2つもさ、右手のブレスレットがたで何でも楽器を出せるようにと、左手のブレスレットで糸、材質はオリハルコンとかヒヒイロカネとかで出せるようにしてくれない？

それくらいはいいぞ。

まあ、ポッター家なら魔法の才能やセンスも十分にあるから大丈夫じゃ。

それもそうだな。

ペンダントとブレスレットは、ヴォルテモート襲撃のときに母の形
見みたいな感じでつけるぞ。

ただし、外したりすることはできなくするからの。
盗まれでもしたら大変じゃからな。

まあ、御主専用じゃからそんなことはないと思つのじやが。
それと能力は努力しないと無理じやぞ。

十全といつてもある程度の努力は必須じや。

そりや そうだな。

ありがとつ。

それじゃあ逝つてこい。

うん。

字が違うね。

そして、下に六があくのは決まつてることなんかあああああああ
ああああああ！！

プロローグ（後書き）

7 / 31　俺が記憶を消した理由を入れました。これで説明つきますかね？　ちょっと違うんじゃないかななどの感想があればお願いします。できる限り皆さんに納得してもらえるよう改稿していくます。

生き残つた2人の男の子（前書き）

今回は原作の台詞を引用してたりします。

生き残った2人の男の子

プリベット通り4番地の住人ダーズリー夫妻には、どこを探したつてこんなにいい子はないということが自慢なダドリーという息子がいた。

そんな彼らは絵に描いたように満ち足りた家庭だった。

けれど、彼らにも秘密が一つある。

ダーズリー夫人の妹は魔法使いだったのだ。
その妹はポッター家に嫁いでいった。

そこまでは知らぬふりで通せるからいいとしよう。

ポッター夫妻にも子供がいたのだ。

そしてその子供が今後ダドリーに関わるのではないか気でないのだ。

そう、ダーズリー夫妻は未来が怖いのだった。

だから、ダーズリー夫妻はポッター一家を遠ざけていた。

けれど、そんな幻想は長く続かない……。

『例の人の人』が死んだ。
このニュースはあつという間に広まった。

この日魔法使いは魔法の秘匿など考えることもなく喜び合つた。

こんなに嬉しい日はないと。

こんなに気分が良い日はないと。

マグルから見ればかなり奇妙だったに違いない。

けれど、そんな中でも喜べない人もいる。

その中の1人ダンブルドアは悩んでいた。

予言の子が2人もいて、その一方は『例のの人』を消していたからだ。

消した子、ハリーの方は今後魔法界ではその名を知らぬ名人になるだろう。

しかし、偶然生き残った、運良く生き残ったハリーの双子の弟、ジエレミーは有名人の弟は何なのだろうか？

有名人の弟。

この子も有名にはなるつ。

けれどそれは、兄のおこぼれ。ハリーの弟としてだけ……。

どう思うかは分からん。

いや、弟なら分かるかもしけんが。

だが、どちらにせよ預けねばなるまい。

ダーズリー一家に。

親戚であり、魔法界から切り離せる場所。

けれども、忌避すべきことはある。

「の子たちをひとつ扱つか。

知っている限りはマグルの中ではあまり良いとは思わんが、それがマグルらしいといえばらしかつた。

だから、手紙を書いた。

それで全てが伝わるとは思わん。

しかし、やうするしか儂らにはできないのだ。

そこまで考えると、猫がこいつを見ていたことに気が付く。

「マクゴナガル先生、こんなところで奇遇じやのう

そう声をかけると、女人が表れた。

「どうして私だとおわかりになりましたの？」

「まあまあ、先生。あんなカチコチなすわり方をする猫なんていやしませんぞ」

このマクゴナガル先生も、ハリーのことが心配で来そうじや。ポッター夫妻とはそれなりに親交があつたからそれは分かる。ただハリーが心配できたという所が儂は心配じや。

「ねえ、ダンブルドア。手紙で一切を説明できるとお考えですか？連中は絶対あの子のことを理解しません！あの子は有名人です伝説の人です　今日のこの日が、ハリー・ポッター記念日になるかもしれない　ハリーに関する本が書かれるでしょう　私は

たちの世界でハリーの名前を知らない子供は一人もいなくなるでし
ょう!」

そのとおりじゃ。

そして、ジエレミーはほとんどの魔法使いが知らぬ人物となりつ。
光^{あに}が強いものの影にいるのじゃから。

低い「ゴロゴロ」という音が夜のプリベツト通りの静けさを破る。

ライトが見えないか探しているうちに音はどんどん大きくなり、見
つけた頃には爆音となっていた。

巨大なオートバイに乗った巨大な男。

その男の手の中には2人の子供が抱かれていた。

儂とマクゴナガル先生が毛布の包みをのぞき込む。
かすかに見えるのは男の2人の赤ん坊だった。
ぐつすり寝ている。

漆黒のふさふさした前髪、そして額には稻妻のような傷の形。

「この傷がある……」

「そうじゃ。一生のじるじやうつ

「ダンブルドア、なんとかしてやれないんですか?」

「たとえできたとしても、儂は何もせんよ」

そう言いながらもう一人の子を見る。

ハリーとは違ひ深紅のリリイ似のふさふさした前髪、両手にはまつてゐる紅と蒼のブレスレットと、首にかけられている美しい色合いと形をした箱形のペンダント。

ハリーのお気に入りの品じやつたな。
これが形見になるとは……

「ハグリッドや」

別れのキスや涙を流しながらハグリッドが優しく置く。

「これですんだ。もうここにいる必要はない。帰つてお祝いに参加しようかの」

「いつまでもマクゴナガル先生とハグリッドに帰るよ」促す。

「幸運を祈るよ、ハリー、ジョリー」

消え入るような声でつぶやき、去つていった。

こうしてこの瞬間、ハリーの^ごり知らぬ所で、あちこちでひつそりと集まり、杯を挙げ、ヒンヒソ声で、いつまでものだ。

「生き残つた男の子、ハリー・ポッターに乾杯！」

そして誰しも突つ込まない。
ジョリー・ポッターも生き残つているとは…………。

ダドリーの誕生日

ダーズリー夫妻が目を覚まし、戸口の石段に赤ん坊が2人いるのを見つけてから、10年近くがたった。

プリペット通りは少しも変わっていない。

けれど、ダーズリー家の居間はほんの少し変わっていた。

ダーズリーの写真ばかり並ぶ暖炉の上だが、1つだけ黒髪の男の子の制服写真があった。

その男の子は額に稻妻のような形の傷を持つており、眼鏡をかけはにかんでいる。

これは、この家にダーズリー夫妻とダドリーの3人以外にもう1人住んでいる気配となっていた。

しかし、深紅の髪の毛の子はそこにいた。

今はまだ眠っているが、もう、そう、長くは寝ていられないだろう。

「やあ、起きて！ 早く！」

「起きるんだよ！」

お母さんの甲高い声と、ドンドンと戸をたたく音で目を覚ます。

急いで、起き上がり支度をする。
ダードリーのお下がりの服に、兄さんのお下がりの服。
お下がりばかりの服装で身を固める。

と、金切り声がした。

穴のあいた靴下や、つぎまただけの服。

けれど、これしか着る物がなかつた。

初めは兄さんにもお下がりを着せていたようだが、大きくなるにつれて、2人分ものお下がりの服はでなくなつていた。

そこで、兄であるハリーに安くとも新品の洋服を買って貰える。当然そうすると、お下がりが一人分以上できることになつた。必然的に僕の洋服が増えるが、ぼろぼろには変わりない。

「まだ、起きないのかい？」

「もうすぐだよ」

「さあ、支度をおし。ベーハンの具合を見ておくれ。焦がしたら承知しないよ。今日はダドリーちゃんのお誕生日なんだから間違いのなこよひになくひや」

僕は内心つぶやひつする。

わかつてこることなのに、何度も何度も……。

そう思いながらベッドからおり、靴を履いてつとめるがベッドの下に入り込んでいた。

『クモさん。ベッドの下にある靴をとつてください』

そう言つと、数十匹のクモがえつこつことと靴を運んでくる。

そんな光景は僕にとって日常の風景だった。

「こまは階段下の物置。」

クモだらけでも当たり前だ。

そして、僕はクモさんと友達だから、暇なときしゃべっててくれるからいいして僕のお願いを聞いてくれるのだった。

兄さんの部屋だったからしたことできないだろうな。

だって兄さんはダドリーのための1室を借りているから、きれいな部屋だわ。

こつして、廊下にてキッキンに向かった。

食卓はダドリーのプレゼントに埋もれてほとんど見えなかつた。ほしがつていたコンピューターもあるようだし、2台のテレビやレース用の自転車もあり、兄さんからも小さにながらプレゼントがあつた。

何故兄さんがダドリーなんかにプレゼントをするのか不思議でならないが僕が考へても仕方がない。

あとで聞いてみよ。

そつそつ、兄さんなんだが膝小僧が立つよつな細い足で、細面の顔に真つ黒な髪、明るい緑色の目をしていて、まるで眼鏡をかけていた。

僕はといえば、髪の毛が深紅なこと、目が緑よりも透き通ったエメラルド色の目をしていて、他は總じて兄さんより細く小さい。髪を真つ黒に染めて、眼鏡をかければ兄さんと見分けがつかなくなるだろ。

額の傷を除いては。

その傷のことをおばさんに聞いてみたことがある。

「お前の両親が交通事故で死んだときの傷だよ。質問は許さない」

と言われてしまつた。

質問は許さない。ダーズリー家で平穏無事で暮らすための規則だつたりする。

「ちゅうじベーコンがいい感じに焼けた頃兄さんがやつてくる。

「髪をとかしてこ」

朝の挨拶代わりに、「おじさん、がんばれ」といふのが習慣。

「わかりました」

そうこつてまた出て行く。

食卓にベーコンと玉子の皿を並べるが、プレゼントでひとどんご隙間のないで置くのは至難の技だった。

僕が難儀している間にプレゼントを数えていたダドリーが顔色を変えておじさんとおばさんと言つた。

「36だ。去年より一つ少ないや」

「坊や、今日お出かけしたときに2つ買つてあげましょ」

「ちゅうじ、ほぐ、30……30……」

「38よ、可愛い坊や」

「ちゅうじか、それならいいや」

僕なんて1つだよ。

毎年1つ。

兄さんからのプレゼント。

兄さんは僕よりも少し多い。

学校の友達から数個とおじさんたちから1つと、僕から1つ。

毎年いいなと思う。

ジリジリと突然鳴った電話は僕にとって幸運な知らせを運んできた。

「バーノン、大変だわ。フィッグさんが脚を折っちゃって、この子を預かれないって」

おばさんは僕の方をあいこでしゃべった。

ダドリーはショックで口をあんぐり開けたが、僕の心は踊った。毎年誕生日になると、ダドリーと兄さんは友達と2人で、おじさんとおばさんに釣れられ、お出かけすることになつていて。僕は、いつも置いてけぼりでふた筋向うに住んでいる変わり者のフィッグおばさんに預けられた。

まあ、フィッグおばさん自体は面白いし、猫ともはなせるから楽しいのだが、やはり置いてけぼりは嫌だ。どうせおじさんは僕を家においていこうとはしない。僕が変わり者だから、変だから家が壊されるとでも思つていろはずだ。

まあ、何度か壊しかけたことはあるが。そういうことで、僕と一緒に連れて行ってくれる。そして、なんと今日行く場所は動物園なのだ。

唐突だけど、僕は動物としゃべれる。クモ、猫や鳥何とだつてしまふ。

ただ、それをおばさんに見られたのが運のつきだった。
「今後一切動物と話してはいけません!」 いつ言われてしまったのだ。

この家で暮らすには守らなければいけない。
でも、おばさんに見られてないとこなら問題なしだ。

だから、血塗やフイッグおばさんの家、誰もこない道ばたで話している。

そんなわけで、動物園に行きたい。

「動物園まで連れて行つたらどうかしら……それで、車の中に残しておいたら……」

「しかし、新車だ。ジョレニーを一人で中に残しておくわけにはいかん……」

ダドリーは急に嘆泣を始めた。
顔を歪めてめそめそ泣けば何でも叶えてくれると想つてゐるみたいだ。

「ダッヂちゃん、ダドリーちゃん、泣かないで。ママがついてるわ。
お前の特別な日をあこひなんかに台無しさせたりしゃしないんだからー！」

おばさんはダドリーを抱きしめた。

「ほぐ……こやだ……あこつが……く、く、くるなんて！　いつだつて、あこつが、めむりめむりにするんだー！」

しゃつくりをあげるふりをしながらわめいた。
けれど、その顔は僕にだけむかって意地悪くにやつと笑う。

ちゅうじゆのときお隣のベルが鳴り、みんなの来訪を伝える。

「ああ、なんてことでしょ。みんなが来てしまつたわ！」

おばさんは大慌てだつた。

そこからは流れで僕は生まれて初めて動物園に行くことになる。信じられないような幸運だつた。

ひとりぼっちにされない。

とても幸せな気持ちに包まれた。

まあ、出発前におじさんに呼べられて「言つておくがな……小僧、変なことをしてみる。ちょっとでもだ、そしたらクリスマスまでずっと物置に閉じ込めてやる」と言われつてしまつた。

いつもは兄さんがしてるんだけどね。

僕がかばつているから兄さんのしたことだつて気付いてない。

それはともかく、僕もたまに変なことしちゃうから注意とかなきや。

例えば、糸で何でも切れるとか、楽器を弾いたら衝撃波がでてしまつたとか。

いまだも、こつそりと公園で練習してたりする。

演奏はストリートパフォーマンスとみられ受けが良い。

もちろんお下がりの帽子を使って顔は隠している。

糸の方は最初は使い方もわからなくて偶然だらうと思つた。

でも、面白いなと糸で遊んでいるうちにブレスレットが突然光り、頭に使い方が流れ込んできたのだ。

驚いて尻餅をついてしまつたが、立ち上がつて感覚に従つてすると面白い使い方ができるようになつたのだつた。

それ以来こちらも楽しくやつている。

あと、暇だつたから名前も考えようとしたがこれまた刷り込まれた知識のように音使い、曲弦師と思いついたのだ。

それと、これは兄さんにも秘密にしていく。

その兄さんほどおかしなことはしていない。

学校の屋根に瞬間移動したり、切った髪の毛が急に生えたり。これのいいわけはどうしても見苦しかつたけど。

動物園での出来事 後編

数十分後僕たちは動物園にいた。

たくさんの動物たちと見られないように注意しながら話すと、
面白い。

僕の知らないことや、動物園に来る人のことをどう思つてゐるかなん
て、動物にしかわからないことを教えてくれる。

ただ、ライオンとかはかわいそつた。

言つことをきかなかつたら無知で何回もたたかれるそつだ。
さぞかし痛かつただらうにと、心配するところは仕方のないことな
んだと言つて、『心配してくれてありがと』とも言つた。

昼食のあとは、爬虫類館に行くことになる。

かんなにはひやつとして暗く、壁にそつてガラスケースが並び、中
には照明がついていた。

ガラスの向うには、いろいろなトカゲやヘビがいて、木材や石の上
をするすると這い回つている。

ダドリーはすぐに館内の中で一番大きいヘビを見つけた。

さつきまで乗つていた車を2巻きにして碎いてくずかごに放り込み
そうな大蛇だったが、今はぐっすり眠つていた。

「動かしてよ」

ダドリーは父にせがむ。

おじさんはガラスをたたぐが、ヘビは身じろぎもしない。

「もう一回やって」

ダドリーが命令するが結果は同じだった。

「つまんないや」

ダドリーはぶつぶつ言いながらどつか行つてしまつた。

兄さんと僕はガラスの前にきて、じつとヘビを見つめた。

このヘビこそ退屈で死んでしまつても不思議はないのではないか。
一日中、ガラスをたたいてちょっとかいを出すバカな人間以外に友達
もいない。

物置で寝起きする僕の方が友達がいてました。
少なくとも、家を歩き回れるし、兄さんもいる。

突然、ヘビはビーズのような目を開け、ゆっくりと、とてもゆっくりと
ま首をもたげ、僕たちの田線の高さまで持ち上げた。

ヘビがウインクした……。

僕と兄さんは互いに顔を見合ひ、誰もいないかと周りを見回す。

大丈夫だ。

僕たちはヘビに視線を戻し、ウインクを返す。

ヘビはおじさんとダドリーに首を向けて、こう言つた。

『いつもひつひつ』

と。

『わかるよ
と、兄さん返す。

『やうみたいだね。他のみんなもやう言ってたからね
と、僕は言つ。

『本当にライライするだらうね』

激しく頷くヘビ。

『といひで、ビビからきたの?』

ガラスケースの横にある掲示板を器用に尾でシンシンとつぶ。

『ブラジルからきたんだ』

僕がこいつと、もう一度尾で掲示板をつぶ。

そこには、『このへビは動物園で生まれました』と書かれていた。

『やうなの・・・・・・じゃ、ブラジル行つことないんだね』

兄さんが言つと、ヘビが頷く。

とたんに、僕らの後ろで耳をつんざくような大声がして、飛び上がりそうになる。

「ダドリー！ ダーズリーおじさん！ 早く来てヘビを見て。信じられないことやつないことやつてるよ」

ダドリーがじたどたとそれなりに全速力でやつてくる。

「どけよ、オイ」

ダドリーが僕の肋骨にパンチを食らわせる。

不意を食らつて僕は兄さんを巻き込みながらひっくり返った。

次の瞬間の出来事はあつという間だった。

ダドリーがガラスに寄りかかった。

次の瞬間、恐怖の叫びをあげて飛び退いた。

僕らは起き上がり息をのんだ。

ガラスケースが消え、さつきまで話していたヘビが外に出てきていたのだから。

館内にいた客は叫び声をあげ、出口へ向かって駆け出した。

ヘビが隣をと落ちすぎたとき、

『ブラジルへ、俺は行く シュシュシュ、ありがとよ。アミーノ』

いつまつて通り過ぎていった。

兄さんがヘビとしゃべれたことに内心驚いていたが、兄さんは僕がヘビと、それ以外にもはなせたことを知りびっくりしているだろうと思つた。

急いで家に帰ると、おじさんは兄さん【聞いた。

「ジョンニーはヘビと話してた。ハリー、そうだろ?」

「せうです」

兄さんもしゃべっていたが疑いのまなざしは僕だけをむく。

ただ今回のことはショックだった。

いつも僕がかばつているが、自分から全て言い出していた。
兄さんから僕がかばうだろうと勝手に差し出されたのは初めてだつた。

「行け 物置 出るな 食事抜き」

と、怒っているおじさんは言つて、物置に何重もの鍵をかけられ閉じ込められた。

知らない人からの兄弟への手紙

今まで一番長いお仕置きを食らつた僕が出て来れたのは夏休みにはいつからのことだつた。

この夏休みが終われば兄さんは別の学校になる。

兄さんはダドリーと同じ名門校に行く。
なぜならおかしくないからだ。

そして、親戚の子供一人まともに育てれないのかという周りの目を気にしてといふこともあるからだつた。

そんなわけで僕は、一人で公立の学校に通わなければならない。

ちょうどこの日は制服を買う日で、ペチュニアおばさんにつれられて2人はロンドンに。

僕はフィッギングおばさんの所でいつも通り過ごしていた。

そして夜になり、ダドリーはピカピカの新しい制服を着て居間を行進している。

その姿におじさんとおばさんは、人生でもつともズバラしい瞬間だとか、こんなに大きくなつて、こんなにハンサムな子が私のちっちゃなダドリー坊やだなんて、信じられないなどと言つていた。

僕はといえば、翌日見た、洗い場におかれた大きなたらいの中の灰色の液体に染められたダドリーのお下がりの制服が僕のだそうだ。きっと似合わないだろ?と思ひながらも、何も言わずに受け取つた。

兄さんと比べれば天と地をほどく差だ。

僕と兄さんの関係は端から見れば良好だらう。

けれど実際はねたましいと思つてしたりする。

お仕置きを僕が受けるのも表面上は仲良くしておかないとダーザリー夫妻にまた何か言われるかもしれないからだつた。

逆に兄さんは蔑みの視線をたまに向けてくる。

ダドリーのイジメ集団には入っていないものの、命令に仕方がなく従つて殴つてきたりすることもあつた。

たぶんだが、動物園のガラスを消したのは、僕に巻き込まれて押し倒されたことに怒つてやつたことだと考へる。
だから、お仕置きに僕を差し出したんだらう。
まあ、他にもまともだと思われていたのにまともじやないと思われるのが嫌だつたんだ。

僕みたいな惨めな暮らしへ誰だつてしたくないからね。

そんな僕らが運命の手紙を受け取るのは朝だつた。
ダーザリー一家にとつては最悪の朝になりそつだが。

「ダドリーや。郵便をとつておいで」

と読んでいた新聞の影からおじさんが言つ。

「ジョンニーにとらせりよ」

「ジョンニー」とつていい

僕は何一つ文句を言つことなく郵便をとつていく。

ここで何か言つたとしても僕の言つことなど無視されるからに決まつていてる。

ならば、言わぬ方が懸命といえよう。

マットの上には4通落ちていた。

「マージおばさんからの絵はがき、請求書りしき茶封筒。それに……僕と兄さん両ての手紙が一つづつ。

僕は手紙を拾い上げてまじまじ見た。

いままだの一度も受け取ったことのなかつた手紙に心臓は鳴り鳴りだ。

『サレー州 リトル・ワインジング プリベット通り4番地 階段下の物置内 ジュレミー・ポッター様』
『サレー州 リトル・ワインジング プリベット通り4番地 一番 小さい寝室 ハリー・ポッター様』

何やら分厚い、思い、黄色みのかかった費用師の封筒には行つており、宛名はエメラルド色のインクで書かれていて、切手は貼られていない。

震える手で封筒を裏返してみると、紋章入りの紫野櫻で封印がしてあつた。

真ん中に“H”と書かれ、その周りをライオン、鷲、穴熊、ヘビが取り囲んでいる。

「小僧、早くせんか！」

キッチンからのおじさん怒鳴り声であわてて居間に戻る。

いそいで、2通を渡し自分のを読もうとする。

「パパ！ ねえ！ ジュレミーが何か持つてるよ

ダドリーが突然叫ぶ。

そいつすると、おじさんがそれをひつたくつた。

「それ、僕と兄さんのだよー。」

僕は奪い返そつとした。

「お前に手紙なんだ書く奴がいるか？」

とおじさんはせせらり笑い、片手でぱらりと手紙を開いてちらりと皿をやつた。

とたんに、赤から青、白っぽい灰色へと顔を変えた。

「ペ、ペ、ペニチコア！」

おじさんはあえぎながら言ひ。

ダドリーと兄さんが奪つて読もつとするが、おじさんの手の中の手紙は届かないように高々と掲げていた。

おばさんは手紙を見るなり、

「バーノン、どうしましょー……あなた！」

と窓戻しそうな声を上げた。

それから、おじさんとおばさんは僕たちを自分たちの部屋へ追いや
りヒソヒソ話し始めたようだった。

止まない手紙

結局おじさんたちは僕たちに手紙を見せず、無視することに決め込んだようだった。

ただ、僕たちにも絶対受け取つてもみるなときつて言われた。

それは、ダドリーに対しても同じだった。

けれど、時間が経つにつれ誰からの手紙か、何の手紙か気になつて仕方なくなる。

それは、兄さんも同じようだった。

手紙を受け取つた翌日、13通もの手紙が届く。

郵便受けに入らないので、ドアの下から押し込まれたり、横の隙間から差し込まれたりしたのも数通あつた。

おじさんに渡す前に宛名をみたが、兄さん宛がほとんどで僕のは1通しかなく少しがつかりだ。

まあ、その手紙は全部焼き捨てられたが。

その次の日、もう手が付けられないほどの手紙が届いた。

牛乳配達が持つてきた、卵の2ダースにも、小さく丸められた手紙が1個1個に隠されてあつたのだ。

それを受け取つたおばさんは怒りのあまりミキサーにすべてをかけた。

「お前なんかにこんなにメチャメチャ話したがつていいのはいったい誰なんだ？」

ダドリーもこの惨状には驚きハリーに聞いた。

そして今日も、僕宛の手紙は1通だけだった……。

また次の日は日曜日だった。

「日曜は郵便は休みだ」

おじさんは疲れたやや青い顔で、しかし嬉しそうに座っていた。

「今日はこまいまじい手紙なんぞ」

そう言い終わらないうちに、キッチン煙突を伝つてヒューッと落ちてきて後頭部にぶつかった。

次の瞬間30枚、40枚もの手紙が暖炉から雨あられのように降つてくる。

おじさんはそれをどうにかわしたが、僕と兄さんはこれはチャンスと手紙を捕まえようとしたが、寸での所で邪魔されてつかむことはできなかつた。

このあと、おじさんは気がおかしくなつたかのよつて手紙を引きちぎつていだが、僕にはその手紙をどうにか見るすべはない。

そして、「荷物をまとめろ」といわれ、どこかに避難するんだなと思った。

避難先は陰<氣くさ>いホテルだ。

今日もまた1通だけしか僕宛の手紙はない。

朝起きてみると、おじさんがホテルの従業員から大量の手紙をもらつていた。

「ここに来ても手紙から逃げる」ことは無理だつたようだ。

かなり不健康そなおじさんとおばさんな顔をした2人は味気ない朝食に何文句を言わず、ただ次に逃げる先を考えているようだつた。

ダドリーはかなり不満やうだつたが、「いつもセー」のおじさんの一言に渋々したがつてゐる。

そして、ホテルからチェックアウトすると食料を買い込みにスーパーによつたあと、船着き場まできた。

「申し分無い場所を見つけたぞ。来るんだ。みんな降つろー。」

そう言つておじさんが指差すのは海の中にはりと立つ、途方もなくみすぼらしい小屋だつた。

「今夜は嵐が来るだー。」の「親切な方が、船を貸してくださる」とになつた

上機嫌やうに言つておじさん。

「食料は手に入れた。一同、乗船！」

凍えるよつな寒さの中、船に乗りやつとのことでつこた小屋はひどかつた。

海藻の匂いがつんと鼻を刺し、板壁の隙間からヒューヒューと風が吹き込んでいる。

そんな中でも、おじさんはこんな所まで手紙を届けにくるものはないと思ったのかとっても上機嫌だった。

僕にとっては、とても不満だったが。

「ジョーレニー、明日が誕生日だつて覚えてるかい?」

兄さんが唐突に声をかけてくる。
けれど、考えてみれば今日が誕生日だった。

最近は手紙のことで頭がいっぱい忘れていたようだ。

「そうだね、兄さん」

毎年、僕たちは2人で誕生日を祝っている。
ただ今年は、兄さんにも僕のもプレゼントがないことだけがいつも違つた。

それも、この状況では仕方のないことかもしれないが。

30秒.....20.....10.....9.....声を潜めて2人でカウントする。

.....3.....2.....1.....

ドーン

僕らの誕生日は爆音とともに震える小屋の中で迎えることになったのだった……。

ドーン

もう一度爆音とともに戸が揺れる。

誰かがノックしているようだ。

ダドリーが飛び起きて寝ぼけた声を上げる。

「何？ 大砲？ ビーム？」

向うの部屋でガラガラガツシャンと音がしたかと思うと、おじさん
が細長い筒 ライフル銃を持って戸の前に立つた。

「誰だ。そこにいるのは。言つとくが、こちには銃があるぞ！」

おじさんんが叫んだ。

……。

一瞬の空白があり、そして……バターン！

蝶番が吹っ飛ぶほどの力で、扉が轟音をあげて床に落ちた。

そして戸口には大男が立っていた。

ボウボウの長い髪とモジャモジャの荒々しいひげに隠れて顔はあまり見えないが、その間から黄金虫のような目がキラキラ輝いている。

大男は窮屈そうに部屋に入ってきた。

身を屈め先ほど壊した扉をいとも容易くはめ直し、

「お茶を入れてくれんかね？　いやはや、ここまでもくるのは骨だつたぞ」

じつ囁いた。

大股でソファに近づき、そこにいたダドリーに向かって、

「少し空けてくれや、太っちょ」

と言ひ。また、

「オーッ、ハリーだ！　それにジェレミーだ！」

と言ひた。

兄さんの知り合い？

今までみてきたがこんな大男はまともじやない。

ドアは壊してくるし、嵐の中こんな建物にも来ている。
そんなのが知り合いにいるのか？

横田で兄さんをみてみると、おびえており、田は「誰？」と語つていた。

「最後にお前さんをミいた時にや、まだほんの赤ん坊だつたな。ハリーは父さんそつくりだ。でも田は母さんの田だな。ジェレミーは母さんにだ。髪も紅いし、田も綺麗な縁だな」

僕たちの両親のこと知つてゐる！？
何者だ？

「いますぐお引き取り願いたい。家宅侵入罪ですぞ！」

「黙れ、ダーズリー。腐った大すももめ」

「こいつやいなや、おじさんの手から銃をひつたくりグーヤリとまげてしまったのだ。

「何はともあれ、ハリー や誕生日おめでとう。お前さんにはちょいとあげたいもんがある……どっかで俺が尻に敷いちまつたかもしないが、まあ味は変わらんだろう。ジョンニーすまんな、お前さんのこと忘れて何も用意できかった」

「べ、べつに、か、か、かまいません」

恐怖でろれつが回らない。

「ありが……あなたは誰？」

兄さんは、お礼より先に疑問が出てしまつたようだ。

「そうだ、まだ自己紹介をしとらんかったな。俺はルビウス・ハグリッド。ホグワーツの鍵と森を守る番人だ」

男は巨大な手を差し出し、兄さんの腕をぶんぶん振つて握手した。

僕は？

なぜかこの大男は僕のことを無視する　見えてないようだった。

「ああて、お茶に使用じゃないか。え？」

そう言つて、暖炉の方に目をやり火がついてないのをみると、それに覆いかぶさりもそもそもと何かをして、はなれた瞬間には炎がめらめらとたゆたつていた。

不思議な様子に驚いたが、兄さんは勇敢にも質問をしていた。

「あの、僕、まだあなたが誰だかわからないんですけど」

「ハグリッドって呼んでおくれ。みんなそう呼ぶんだ。やつを叫つたようにホグワーツの番人だ。ホグワーツのことばもちうん知つとろうな？」

「あの……、いいえ」

ハグリッドがショックを受けたような顔になると兄さんは「『めんさんさい』」と謝る。

「『めんなさい』だと？　『めんなさい』は『めんさん』が手紙を受けとつちらんのは知つとつたが、まさかホグワーツのことまで知らんとは、思つてもみんかつたぞ。なんてこつた！

お前の両親がいついたいどいで『めんさん』ことを学んできたか不思議に思わんかったのか？」

「『めんさん』と僕の声は重なり尋ねた。

ハグリッドの言つことは僕にとって新事実ばかりで信じられなかつた。

ただ、父さんと母さんの「ひとせこじやべらな」とこからおじさんとおばさんはずしかったし、何かしら不都合があったんだとすれば納得もこった。

「こんなことって、だと、ちよつと待つたー。」の子が……このこともありうものがシランにうのか……弟のジョンニーならまだしも……全く何にも？」

「僕少しなら知つてるよ。算数とかそんなのだつたら」

話しがかみ合つてないようだつた。
このハグリッドが言つのは何かしら別のことだひつ。
たぶん、おかしなこと。

「我々の世界なことだよ。つまり、あなたの世界だ。俺の世界だ。
あんたの両親の世界のことだ」

「なんの世界？」

「ダーズリーー！」

ドックランという効果音が似合つような声と形相でおじさんを睨む。
そのおじさんはといふと、顔を青ざめさせ、「むにゅにゅにゅ」と要領の得なことを言つばかりだった。

「じゃが、お前さんの父さんと母さんのことは知つるだろつな。
「両親は有名なんだ。お前さんも有名なんだよ。ジョンニー、お前さんはちと別だが」

僕は兄さんみたいに有名ではないようだ。

いわゆる、ハグリッドの世界のビーハーでもいる子供のようだった。

「えつ？ 僕の……父さんと母さんが有名だったなんて、ほんとに？」

「知らんのか……お前は自分が何者か知らんのだな？」

「やめろ！ 寄人。 いますぐ止めろ！ その子た「きさま！」 ヒツ」

「貴様は何も話してやらなかつたんだな？ ダンブルドアがこのために残した手紙の中身を一度も？ 僕はあの場にいたんだ。ダンブルドアがおいたのをみてたんだぞ！ それなのにきさまは、ずっとこの子たちに隠してたんだな？」

「いつたい何を隠してたの？」

「止める！ 絶対に言つな！」

おじさんは狂つたよつて叫び、兄さんは好奇心に満ちあふれた顔をしていた。

僕はといえば、ただこの話を冷静に聞いていた。
突拍子もないことをただ信じるわけにはいかない。

でも、この場のおじさんたちはあからさまにおかしくなっている。
ということは、大なり小なり信じる価値はある。

「ハリー、ジレミー お前たちは魔法使いだ

「「魔法使い！？」」

「ああ。しかも訓練やえ受けりや、そんじょそじらの魔法使いよりすこくなる。なんせ、ああいう父さんと母さんの子だ。お前さんたちは魔法使いに決まっている。やうじやないか？ やで、手紙を読むときが来たようだ

それは、先日から届いていた手紙と宛名以外は全く同じものだった
……。

『海の上 岩上の小屋、床 ハリー・ポッター様』

『海の上 岩上の小屋、床 ジョレミー・ポッター様』

僕らは手紙を取り出し、読んだ。

要約するとこんなことが書いてあった。

ホグワーツ魔術学校への入学が許可され、そのための必要なもののリストがあるということだった。

また、校長がアルバス・ダンブルドアで、たくさんの肩書きを持つおりすごいということと、副校长がミネルバ・マクゴナガルということだ。

そして7月31日必着で返信がいるということだった。

ただ、フクロウ便というのは理解しがたい。

けれど、つい最近の手紙の嵐のときフクロウがなぜか家の周りにいたから納得がいった。

思考にふけつていると兄さんは色々ハグリッドに聞いてみたいだ。
「ハリー、ジョレミーは行かんせんぞ」

「お前のようなコチコチのマグルに、この子を引き止められるもんなら拝見しようじゃないか」「

と、おじさんに向かつて言うハグリッド。
「マグルって？」

「マグ なんて言ったの？」

と、兄さん。

「マグルだよ。連中のようつに魔法族ではないものをわしらはそう呼ぶ。よりによつて、俺のみた中でも最悪の、極めつきの大マグルの家で育てられるなんて、お前さんたちも不運だなあ」

「ハリーたち2人を引き取つたとき、ぐだらんじゅぢやはおしまいにするとわしらは誓つた。このこの中からそんなものはたたき出してやると誓つたんだ。そのために、ハリーにはダドリーと遜色無い生活をさせてきたんだ！ 魔法使いなんて、まつたく！」

おじさんとおばさんは知つてたようだ。

それに、兄さんだけ巣廻してたのか。

何で僕たち2人一緒にしてくれなかつたんだ？

「知つてたの？ おじさん、僕があの、ま、魔法使いだつてこと、知つてたの？」

「知つてたかですつて？ ああ、知つてたわ。知つてましたとも！ あのしゃくな妹がそつだつたんだから。お前だつてそうに決まつている。それに妹に良くなつてゐるジェレミーなんて絶対そつだと確信を持つてましたとも。妹は、休みで帰つてくるときによ、『シップをネズミに変えちまう』。父も母も、やれりりー、それりりーって我が家に魔女がいるのがいるのが自慢だつたみたいだつたけど、私は氣付いてたんだよ……奇人だつて」

おばさんは妹がうらやましかつたんだ。
褒められるのは妹ばかり。

まともな人間が特別な人間に勝てるわけない。
だから、あんなに特別なことがきらいだったんだ。

「妹は自業自得で吹っ飛んでしまった。おかげで私たちはお前たちを押し付けられたってわけさ！ そして、手紙にはハリーはかなり特別だったて書いてあつたから仕方なくいい生活をさせてやつたんだよ」

兄さんは特別だったんだ。

だから、まともにしようとも、あんなに必死でダードニーと回りこよつさせたんだ。

ただのおかしな僕、母さん似の僕はおばさんからみれば、みるだけで悪意が湧く存在だろう。それでも、今まで生活させてもらえたのは殺すや捨てるとこつたまともじやないことができなかつたからだ。

「吹っ飛んだ！？ 自動車事故じゃないのー！」

と、兄さんは聞く。

「自動車事故！ 自動車事故何ぞ、リリー・ジエームズが死ぬわけがないだろう。何たる屈辱！ 何たる恥！ 魔法界の子供は1人残らずハリーの名前を知つてゐるのに、ハリー・ポッターが自分のことを見らんとは！」

と、怒るのようなうなり声でハグリッドが言つ。

「でも、どうしてなの？ いつたい何があつたの？」

それから、ハグリッドは語つた。

『例のあの人』と呼ばれるヴォルテモートが、母さんと父さんを襲つたこと。

そこで、兄さんを殺そうとして消失したこと。
そのとき、兄さんの稻妻形の傷ができたこと。
その傷は強力な悪の鈍いにかけられた傷だといつこと。

だから、兄さんが『例のあの人』を倒したことで、魔法界では英雄となつてゐること。

そして僕は、たまたま先に兄さんが狙われて『例のあの人』が撃退されたから生きているということ。

ただ幸運だとしつこと。

だから、兄さんとは逆に知つてゐる人はほとんどないといふことだつた。

最後に、兄さんと僕は魔法使いだといふ根拠を言われた。

「行きたいか？お前たちが行きたいというなら、お前のよつな口チコチのマグルに止められるものか」

「僕は行きたい」

「僕も兄さんと同じで行きたい」

「ふやける」「そうか。なら明日は街へ言つて、教科書やら句やら買わんとな！」

ハグリッドはおじさんの言葉を遮り僕たちに言つた。

僕は「これで自由になれる！」

ダイアコン横町に行く

翌朝、目が覚めてみると昨日のあらじて比べればとても穏やかだった。

ハグリッドという大男は来なくて、兄さんと誕生日を祝つてすぐには寝たのかといづくらに静かだ。

けれど、夢じゃないことはわかっている。

僕はやっと、まともな生活が兄さん並みの生活ができる。

物置もべつに悪い所じゃない。

クモさんとのおしゃべりも樂しいし、どこでも手が届く狭さは良かった。

でも、やっぱり、兄さんがうらやましかった。

おじさんたちにあまり制限されず、自由に振る舞える。

僕は、あれこれ言われほとんど何もできない。

僕には兄さんしか親しみをもてる人はいなかつたけど、兄さんは友達もいたし、おじさんたちも少しば優しかつたからそれなりだっただろう。

部屋でも、心でもほとんど一人きり。

でも今日は違う。

僕も、兄さんみたいに友達を作れる。
ダドリーにも邪魔されない。
何にも邪魔されない。
自由なんだ。

だから、この歡喜を感じていた身体は脳は夢なんて勘違いではない。

「おせよひ」

兄さんが起きてきた。

「おせよひ」と、兄さんが返してくる。

その兄さんの後ろをハグリッドが歩いてくる。

「ハグリッドもおせよひ」

「おはよひ、ジーハー。着替えはすまじてあるか? 出かけるわい。今日は忙しそうかな。ロンドンまでまつてお前さんたちの入学用品を揃えんとな」

「あのね……ハグリッド

「ん?」

「僕たちお金無いんだ……それに、昨日おじさんから聞いたでしょう。僕たちが模倣の勉強していくのこなお金は出せないって」

と、兄さんが言ひ。

「そんなこと心配はいらん。父さんと母さんがお前さんたちに向こうも残していなかつたと想つのか?」

「でも、家が壊されて……」

「まさか一家の中に金なんぞおこでおくものか。ああ、まずは魔法使いの銀行、ゴングリッジへ行くわ」

「魔法使いの世界には銀行まであるの？」

「一つしかないがね。グリンゴッヅだ。小鬼が経営している」

「！」・お・に・？」

「そうだ。だから、銀行強盗なんて狂氣の沙汰だ、本當に。小鬼ともめ事を起こすべからずだよ。何かを安全に閉まっておくには、グリンゴッヅが世界一安全な場所だ。たぶんホグワーツ以外ではな。実はダンブルドアに頼まれて、ホグワーツの仕事がある」

ハグリッドは誇らしげにハリーに語った。

「僕はといえば、小鬼さんと友達になれたらいなって思った。
どんな姿かとつても興味がある。
それにどんなことをいつも考えてるんだらうな。」

それにして、父さんと母さんは僕らにお金を残したんだろうか?
それとも、兄さんに?
まあ、行ってみればわかるか。

「忘れ物はないかな。そんじゃ、出かけるとするか」

嵐がやんだ海はとても穏やかで、ハグリッドが魔法で動かしたボートに揺られて目的地へと向かった。

その間に、魔法省とか、ゴングリッドにはドラゴンがいて、入っても迷つて出れないとか、コーネリウス・ファッジ大臣の話しどと、

ハグリッドがドラゴンが子供のころから欲しいとか、何かいっぱい聞いた。

それと、2枚目の紙のリストを確認した。

何かどれも今までじゃ考えられないようなものばかりだ。

ローブしかり、三角帽しかり。

これから行く所で買えるんだろうけれど、ロンドンで買えるのか？

「どこで買うか知つてればな」

同じ疑問を思った兄さんが聞いていた。

その、どこが問題なんだけどね。

これも、ついていけばわかるからいつか。

そして、現在『漏れ鍋』と書かれた看板の薄汚れたパープの前に立っている。

ここが？

そう思つてゐるうちにハグリッドは中に入つてしまつた。

慌てて兄さん僕の順番で入つていく。

「大将、いつもやつかい？」

とバーテンが聞く。

「トム、だめなんだ。ホグワーツの仕事中でね」

ハグリッドが大きな手で兄さんの方をパンパン叩きながらわざわざ言った。

「なんと。」ちらかいやこの方が……」

漏れ鍋は急に水を打つたように静かになる。

兄さんは本当に知らない人はいないんだ。

僕は……。

「やれ嬉や！ ハリー・ポッター何たる光榮……」

バーテンはカウンタから出てきて兄さんに駆け寄り涙を浮かべながら手を握った。

「お帰りなさい。ポッターさん。本当によつ」お帰りで」

これをきっかけに兄さんの周りにはパブにいたほとんどの人がそばに寄つて「お帰りなさい」と言つていた。

僕はといえば、少し離れてみていくことしかできない。

「クィレル教授！ スネイプ教授！？」

ハグリッドがちょうどハリーの周りが少し落ち着いた頃に言つた。

「クィレル先生とスネイプ先生はホグワーツの先生だよ」

「ポ、ポ、ポッター君。お会いできて、ど、どんなにつ、うれしいか

「クイレル先生、どんな魔法を教えていらっしゃるんですか」

「や、や、闇の魔術に対するぼ、防衛です」

教授はまるでそのことを考えたくないともいつよひにいつのだった。

そして、吸血鬼の本がどうたらといつてわざと出して行つてしまつ。何か兄さんに近づきたくなさうだつたな。

「ジーレリー・ポッター。吾輩はセブルス・スネイプ、魔法薬学を教えている。ハグリッド、吾輩はこっちを連れて行く。ハリー・ポッターとはお前がいけ」

「そうかい。ジーレリー、ここにいたん別れだ。ハリーのことは任せな」

「そうこうことだ、行くぞ」

「ちよ、ちよとびひつこうとですかーー？」

「いいから来い」

僕はいきなりスネイプ先生に拉致られてしまった。

なんでこの人は兄さんじゃなくて僕に自己紹介を？
それに、この先生が僕を案内してくれるの？

ハグリッドと兄さんと一緒に買い物は結構楽しみだつたんだけど、この人は悪い人じやなさそうだ。
いや、良い人だと思つ。

それに、僕をしつかりみてくれた初めての人になるのかな。
だからついて行こう。

いひして僕は兄さんたちより先に魔法世界に踏み込むこととなつた。

グリンゴッシ銀行

「こきなり手を取つて連れてくるなんて強引ですね、スネイプ先生」「仕方がなかろう。あの空氣はきついのだ。お前も同じであります」

「そりや、やうだけど……。でも、なんどいじからはスネイプ先生が連れて行つてくれるの?」

「お前の分の銀行の鍵を持つているのが吾輩だからだ。リリー、お前の母さんから預かっていたのだよ」

「お母さんを知つてるの?」

「ああ、知つてゐる。知つてゐるとも。お前はとてもリリーに似ていふ。目の色も髪の色も本当に似てゐる」

「やつか……」

スネイプ先生はどうやら母さんの知り合いみたいだ。いや、知り合ひといふよりも、と近い関係みたいだった。ハグリッドが安全だとこうグリンゴッシの鍵を預けてくることからもわかる。

「右にあるのが鍋屋だ。そのフクロウのなく声が聞こえる店は、一口上りのフクロウ百貨店だ」

と、色々説明されながら歩く。

「スネイプ先生、学校ではどんな魔法を習つの？」

「一年生はたいした数の魔法はしないが 難しいのは変身術だ」

「そりなんだ。先生は得意なのとかあるの？」

「闇の魔術に対する防衛術は得意だな」

「そりなんだ。魔法薬学は？」

「作り方さえ間違えなければうまくできる。ただ、教科書通りではうまくいきにくいときもあるが」

「珍しい薬とかないの？」

「フェリックス・フェリシスは珍しい。通称幸運の液体と呼ばれている」

「それって飲んだら幸運になるの？」

「そうだ。まあ、簡単には作れないし、そう手に入るものでもないから飲むことは一回あればいいくらいだ」

「そんなことないよ。しっかり勉強して作れるようになるー。できたら、先生にもあげるから」

「それなら授業についてこい。吾輩は厳しいからな

「うんー。」

「「」」がグリンゴッツだ」

ちょうど質問が一区切りした所で、銀行についた。

小さな店の建ち並ぶ中、ひときわ高くそびえる真っ白な建物だった。磨き上げられてブロンズの観音開きの両脇に、深紅と金色の制服を来て立っているのは……

「さよう、あれが小鬼だ」

先生が小さな声で教えてくれる。

僕より頭一つ分くらい小さい小鬼は賢そうな顔つきに、尖ったあごひげ、それに手の指と足先が長い。

中に入つていくと、百人を超える小鬼が細長いカウンターの向こう側で、脚高の丸椅子に座り大きな帳簿を書いたり、心中のはかりでコインの重さを量つたり、片眼鏡で宝石を吟味してしたりする。

みんな忙しそうだな。

友達になつてくれる人いるかな？

友達になつちゃうけど大丈夫かな？

1号はスネイプ先生だよ。

ハグリッドは……兄さんばつかりみてたから微妙かな。

「ジエレミー・ポッターの金庫と吾輩の金庫まで行きたい。案内を頼む」

「鍵はお持ちでいらっしゃいますか？」

「ああ」

そういって、ポケットからふたつの鍵を取り出し小鬼に渡した。

「グリップフック！ この方達の案内を頼む」

グリップフックと呼ばれた小鬼が「あらはやつてくわ。

「ほんとうは。これからよろしくね」

「はい。では、ひかり」

そう言って案内された先は石造りの通路だった。

グリップフックが口笛を吹くと、小さなトロッコが元気よく「あらに向かってくる。

それに乗り込み、くねくねと曲がる迷路のよつな道をドンドン進んでいく。

ついには鍾乳洞の中に入り、少し寒いかなと感じたとき、

「寒くはないか？」と、先生が聞く。

「大丈夫です、先生」と返す。

我慢で着ない寒さでもない。

冬の登校はもつと寒かった。

やがてトロッコが止まり、

「きました」

と、グリップフックが言つ。

とても分厚そうな扉に鍵を差し込み、ガチャリと開ける。

緑色の煙がもくもくと吹き出していく。
それが消えると僕はあつと息をのんだ。

中にはバッグが一つ。

「これはお前のものだ。まあ、お前の兄に比べれば少なすぎるかも
しないがな。それでもお前のだ」

「バッグ一つ?」

これだけ?

「」のバッグはリリーがいつも使つてたものだ。中には空間拡張魔
法がかけられている。何から何までその中に入つていいはずだ」

良かつた。

これだけだったらびっくりだよ。

バッグの中を見るとたくさんのお金と、魔道具が入つていた。

でも、兄さんはもつと貰つてゐ……。

なんで?

母さんたちはなんで僕に兄さんと同じ量をくれないの?

やつぱり兄さんが…………「おーーー」

「ひやー！」

考えていたらぼーっとしてたみたいだ。
いきなり声をかけられたから驚いて噛んでしまった。

「もつ見つけたか？ このバッグの中にはお前への手紙が入っている。リリーからのだ」

「母さんからの手紙？」

「そうだ」

「手紙を僕に読ませるのが仕事だ」と、付け加える。

僕は手を奥まで入れ手紙をつかみ取った……。

お母さんからの手紙

『ジョン・ハリーへ

あなたがこれを読んでいるとき私たちは死んでいるでしょう。

「めんなさいね。あなたの大きくなつた姿、見たかったわ。

まずはあなたの名前について話しましょ。ハ。

ジョン・ハリットのせな、神に選ばれし者をさすのよ。

そして、あなたは本当に神に選ばれてるの。

あなたを身にもつたことがわかつた日、信じられない」と夢に神
が出てきたの。

そして私に言つたわ、「あなたが産む子であとに産まれてくる方の
子は神の祝福を受けています。あなたの大切にしていくブレスレッ
トつと、ペンダントつに私が力を込めます。それを、その子に
つけてあげなさい」と。

こんな話しを聞いてお母さんがおかしくなつたんじゃないかなって思
つた?

最初、私もそうなつたと思ったわ。疲れてたからこんな夢を見たん
だつて。

でもね、朝起きてみると一冊の本があつたの。

見たこともない本でね、探知の魔法をかけてみたわ。

そのときの押し寄せる情報の波は今まで感じたこともなく綺麗で、重くて、多かつた。そして、そのすべてがあなたに語りかけているようだつたわ。

だから、確信せざるをえなかつた。昨日の夢に出てきた神様は本物だと。

あなたは優秀な魔法使いになれる。

でも逆に、魔法使いの天敵ともなりえるの。

神のあなたに与えた力はそう言つものだつたわ。

詳しく述べ金庫と一緒においてあるバッグの中の本を見なさい。

それが、神からの贈り物だから。

私はあなたに「好きに生きなさい」とだけしか言えないわ。

あと、「めんね。ハリーより少ない金庫で……。

バッグ一つだけが入つてゐるなんて驚いたわよね。

だけど本の入つてゐるバッグだつて魔法で空間拡張がしてあつたのわかった?

その中にはね、かなりのものが入るし、入れてるわ。

ホグワーツの私の知つている限りを書いた本も入れてある。

だから、頑張って生きなさい。

あなたのお母さん、リリーより

『P・S・セブルス、ジレーリーのことは任せたわよ。』

ありがとう、お母さん。

僕のこと心配してくれて。

僕のこと大切に思ってくれて。

こんなにも思いの詰まったものを貰つたのに、文句なんて言わないよ。

お母さんがどこででも自慢できる息子になつてみせるから。
この名前に恥じないくらいすごい人になるから。

だから、安心して眠つてね。

「先生、『P・S・セブルス、ジレーリーのことは任せたわよ。』
とお母さんが手紙に

「わかつてゐる」と……」

吐き捨てるように言いながらも、優しそうな表情を浮かべる先生はとても嬉しそうだ。

金庫にある魔道具で必要そののを先生に見繕つてもらいバッグに
いれ、お金も必要な分だけを教えてもらつ。

そして、ありがとうと小さくつぶやきながら金庫をあとにする。

次にトロシコが向かつたのは先生の金庫だ。

僕のときとは違ひ慣れた動作で素早く何かをとつてきた。

「ジヒレミー、私からの誕生日プレゼントだ。10年分は私のホグワーツ時代に使つていた教科書と魔法薬学などの集めた蔵書だ。今年の分は上に戻つてから渡そう」

「ありがとうございます！」

僕のバッグにいれてくれる。

スネイプ先生は優しい人だ。

兄さんを除いて僕に誕生日プレゼントをくれた唯一の人だよ！
頑張つて勉強して、スネイプ先生の期待に答えなきや！

それに、今年の分は何をくれるんだろう？

とつとも楽しみだよ。

お母さん。

僕を愛してくれて本当にありがとうございます。

地上に上ると光がとても眩しい。

「フリッグフック、案内してくれてありがとう。良かつたら友達になつてくれないかな？」

「はい。あなたを見ているととても懐かしい気がします。」
「よろしくお願ひします」

握手をして別れる。

とってもいい人だった。

小鬼つて怖いもんでもないんだな。

友達になれて本当に良かった。

「小鬼が人間に對してあれほど友好的になるとは
買わないといけないものはたくさんあるからな」

さあ、行くぞ。

「君はマダムマルキンの洋装店で制服を買つてこい。私は鍋など買つてくれる」

先生はそう言つてすたすたと買いにいつてしまつた。
僕は先生に言われた店に行く。

マルキンさんは藤色づくめの服を着た、愛想のよい、ずんぐりした魔女だつた。

「坊ちゃん。ホグワーツなの？ 全部ここでやりますよ」

「ありがとうございます」

僕はもう一人いた魔女さんに、踏台の上に立たせ、頭から長いローブを着せかけ、丈を合わせピンで留め始める。

それから少しばかりたち、終わる頃に僕と同じくらいの子が入ってきた。

「君もホグワーツかい？」

「そうだよ」

「僕の父は隣で教科書をかつてるし、母はどこかその先で杖を見ている」

「そうだな。僕も、スネイプ先生が鍋とかを買つてるよ」

「先生？」

「そうだよ。スネイプ先生。魔法薬学の先生なんだって。ここのこと知らない僕を案内してくれてるんだ」

「へー。スネイプ先生が……。君はクィーディッチをするのかい？」

「クィーディッチ？」

「そうか……知らないんだ。マグルかい？」

「違うよ。お父さんお母さんもホグワーツに通つてたって聞いたよ。
僕はただマグルに育てられてたってだけ」

「災難だつたね。そしたら、両親は……」

「死んじやつてるよ」

「そつか
」

「じゃあ、僕は行くね。ちょうど先生がこっちに向かってるのが見えたから。また今度ホグワーツでね」

「やうだな。僕の名前はドラコ・マルフォイ。君は?」

「ジーハリー・ポッター」

同じ年の魔法使いの子に初めてあつた。
あのことも友達になれるといいな。

「行くぞ、ジーハリー」

先生が洋装店から出てきたのを見て声をかけてくる。

「はい!」

「次は杖だな。杖は オリバンダーの所だな。リリーの才能を持つているお前には最高の杖じゃなければダメだ!」

僕は頷く。

先生に才能があるって言われた。
褒められると嬉しいな。

それに母さんってやつぱす”い魔女だったんだ。
ホグワーツの先生からこんな言葉を言わせるんだもん。

「さっきのお店で僕と同じくらこの子でマルフォイって子にあったんだ。その子が言つてたんだけど、クィディッチって何か？」

「魔法族のスポーツだ。箒に乗つてボールをリングに入れるのだ。細かいルールは結構あるが金のスニッチといわれるものをとつたら試合終了で、得点を競う。国ごとにチームがあつたりする」

「面白そうだなー。ホグワーツでもあるの？」

「あむ。寮で対抗戦をしてくる」

「寮？」

「スリザリン、レイブンクロー、ハッフルパフ、グリフィンドールの4つがある。入学当時に組み分けをする」

「先生はどの寮だったの？」

「スリザリンだ。お前の母さんはグリフィンドールだった」

「僕はどこの寮になるかな？」

「是非スリザリンに入つて欲しいものだが、母さんと同じどこがいいのならそれはそれでいいのではないか？ ちなみに私はスリザリ

ンの寮監だ

「うーん。入学までに頑張つて考えとく。お母さんのホグワーツについて書いた本を読んでみるよ」

「やうか ついたぞ」

目の前には、はがれかかった金色の文字で、扉に『オリバンダーの店 紀元前382年創業 高級杖メーカー』と書かれてある。ほこりっぽいショーウィンドウには、色あせた紫色のクッシュョンに、杖が一本だけ置かれていた。

中に入るとどこ家屋の方でチリンチリンとベルが鳴る。小さな店内に古くさいすが一つだけ置かれていた。

「こりっしゃいませ」

柔らかな声がした。

目の前に老人が立っている。

店の薄明かりの中で、大きな薄い色の田が、2つ丸のよつに輝いている。

「こんにちは」

と元氣よく言ひ。

「オリバンダー、こいつに合つ杖を頼む」

「セブルス…………そりこりとか」

「余計な詮索はするな

何かあるみたいだけど 気にしない方がいいみたいだ。

「あなたのお名前は？」

「ジユレリー・ポッターです」

「そうですか。そうですか。お母さんと本当似ていらっしゃる。あの子がここにきて杖をかつっていたのがつい昨日のことのようじや。あの杖は26センチの長さ。柳でできていて、振りやすい、妖精の呪文にはぴったりの杖じゃった、お父さんの方はマ「ゴホンツ」ジエリミーさんの杖を選びましょつか。どちらが杖腕ですかな？」

杖腕……利き手のことか。

「右です」

「腕をのばして。そりそり」

オリバンダーさんは肩から指先、手から肘、肩から床、膝から脇の下、頭の周り、と寸法を探つた。

その間、杖に関する話をしてくれた。

オリバンダーの杖は一つとして同じものはない。
強力な魔力を持つたものを杖の芯にしている。
売った杖は全て覚えているなど。

その後、オリバンダーさんは何本かの杖を持ってくれた。けれど、どれも僕には合わなく、少し困ったような顔をしている。

「これはいかがかな。世界樹に鳳凰の尾羽。 29センチ。良質で锐い」

と、ひらめいたように僕に言つて杖を差し出してくる。

その杖を握った瞬間　急に指先が暖かくなつた。

杖を頭の上まで振り上げ、ほこりっぽい店内の空氣を切るようヒュッと振り落とした。

すると、杖の先から紅と銀色の火花が花火のように流れ出し、光の玉は店内を踊るように飛んだ。

「ラブー！　すばらしい。この杖は創業当初からあるもので今まで使える人があらず、杖の存在自体忘れかけておつたが……あつてなによりじゅ」

「とってもなじんで良い感触です」

「それは良かった」

「これで、全て買い終わった。漏れ鍋に部屋を取つてある。9月1日の、キングズ・クロス駅発の汽車でホグワーツに行ける。この切手に細かいことは書いてあるから良く読んでおけ。それで、今年の分の誕生日プレゼントはペットだ。フクロウではないが手紙も運べる。こいつの飼育は難しい。でも、お前ならできるはずだ」

そういうて、切符と小さな赤い鳥を僕の手につかませた。

「この鳥は不死鳥、フェニックスだ」

「ありがとうございます。今日は先生にお礼を言つてばつかだ」

「気にするな。11年分と考えれば少ないくらいだ。これでも私は多忙の身でね。ホグワーツで会おう」

「はい、先生！」

こつして僕の買い物は終わった。

杖選び（後書き）

スネイプ先生の不死鳥ですが野生にいるのを連れてたという設定です。不死鳥は育てるのが難しいのでダンブルドア以外かつていな
いということです。

9と4分の3番線と出合いで

兄さんはダービー家に戻ったようだが、僕はスネイプ先生のおかげで帰らずにすんだ。

あそこに僕の必要なものなどない。

心残りがあるとすればクモさんにお別れを言つてないことだけだ。

そんなわけで、9月1日までの1ヶ月漏れ鍋に泊まつた。

宿泊期間のお金は先生が払ってくれた。

先生、ありがとうございます。

宿泊中はご飯のとき以外は神様からの本を読んで修行するか、ホグワーツの本を読むか、アウリアの世話以外何もしなかつた。アウリアというのは先生から貰つた不死鳥の名前だ。

まず曲弦師なのだが、1ヶ月でほとんど完成系といえるくらいまで上達した。

部屋の中には無数の糸を張つて、漏れ鍋の中にも細かい糸を張つてどんな人が来たか調べたり、使いこなす訓練を多くした。リンゴを糸で1ミリ四方で切ることができるようになつた。

まあ、これだけでは満足していながら。

音使いは音のできるもの全てをプロと同じように弾けるようになる。作曲できるようになる。

この2つを目標にしてまず取り組んだ。

半月でできるようになった。

残りの半月は音使いとしてのスキルの練習に取り組んだ。衝撃波は7割。心身掌握は8割。

それくらいできるようになった。

まだまだ、練習が必要だ。

幻獣使いはまだペンドントの解放を制限しているため、使えるかどうか微妙だ。

ただ、アウリアがすぐくなつていて、所から見るとたぶん大丈夫だらう。

そのアウリアなのだが、1ヶ月前は雛鳥ほどのが今となつては立派に大きくなつた。

ホグワーツに関しては全部覚えた。

先生とかは違うかもしぬないが寮について、回転する階段、秘密の通路などは完璧だ。

特に面白そうだと思ったのは必要な部屋だった。

必要なものを思い浮かべて入るとそれがそこにあるみたいなのだ。学校に行つたらまず使おうと思つ部屋ナンバー1だ。

それとグイティッチだが、父さんがグリフィンドールでシーカーをしていたようだつた。

このクイティッチは聞くかぎり面白そつなので出れるなら出てみたい。

まあ、1ヶ月を振り返つてみればこんなものだ。

魔法の練習と教科書を全然読むことができなかつたのが心残りだ。ホグワーツに行けばいくらでもできるだらう。

そして今、キングズ・クロス駅の9と10の間にきていて、けれども9と4分の3番線はない。

まあ、常識的にいえば当たり前だ。

間にホームがあつたら怖いし、どうやって汽車を停めるんだ？

そんなわけで絶賛迷子な訳だ。

先生も教えてくれればいいのに。

まあ、これはマグル世界から魔法世界に来る者への試練か何かなんだろう。

『クモさんいますか？』

『なんじやい』

『ここいら辺で鳥を持った変な人たちを見ませんでしたか』

『見たぞ。フクロウなんかもってどうするんだろうな』

『どうするんでしょうね。それで、その人たちでどうかで消えましたか？』

『消えたぞ。ほら、そのこの柵だ。それがどうした？』

『実は僕もその人たちの仲間でしてね。そんなわけありがとどうぞ』

『良いつてことよ』

よし。

そここの柵が入り口のようだ。

そっちを向いたとき、僕と同じくらいの女の子が前に来た。
その女の子はカートを引いており大量の荷物がは行つたであるうトランクをのせていた。

この人も同じ？

その女の子の後ろにはマグルらしき父親と母親がいた。

でも、「9と4分の3番線はここだわ」という声が聞こえる。

「あのー、すみません。この柵が9と4分の3番線の入り口ですかね？」

「そうよ。あなた何も聞いてないの？」

「切符だけ貰つて聞いてなかつたんで不安だつたんですよ」

「その人も結構抜けてるわね。私はハーマイオニー・グレンジャー

「僕はジエレミー・ポッター。那人抜けてなんかないと思うけどなー。那人魔法薬学の先生みたいだし」

「そうなのー？」

「そうだよ」

「話してる所」「めんね。ハーマイオニー、そろそろ行かないと

「そうよね。じゃあ、先行くわ」

「それじゃあ、汽車でね」

グレンジヤー一家が先に入り、その後に続く形で入る。

ぶつかる！

そう思つた瞬間開けた場所に出でいた。

そして、そこに表れたのは紅色の蒸氣機関車どこつたがえすた人だ。

ホームの上には『ホグワーツ行特急11時発』と、改札口のあつた所には9と4分の3番線と書かれてある。

ほとんどの人が荷物を預ける中、僕はそのままスタスターと中に入つていく。

荷物はバッグに全て入れてある。

アウリアは、ペンダントの中に入つてもらつた。

まだがら空きな席に一人座り本を取り出す。

今日は長い旅になりそうだ……。

同じ年の友達

発車の時間が近くなり、車内が騒がしくなる。

本から一度視線を外し、窓の外からホームを見る。どの子も親との別れの悲しみと、これから過「」す一年間に期待を膨らませた顔をしていた。

兄さんは僕と同じだろ。おじさんとのわかれなんて惜しまず、ホグワーツでの生活に心ときめかせているはずだ。

コンパートメントの扉が突然開き一瞬びっくつした。

「おはようございます。」

「空いてるよ。ハーマイオニーでよかつたよね?」

「やうよ。席が埋まつててよしやく見つけた空きがこいつだんだけど、あなたがこりなんてびっくりしたわ」

「僕もそうだよ」

「ジーハリーはマグル生まれなの?」

「いや、違うよ。でもマグル育ちではあるかな。親がね、赤ちゃんのときに死んじゃって預けられたんだ」

「やうなの、」めぐなさこ

「謝る必要なんてないよ。べつに辛い話しつつわけでもないし。」
応兄さんもいたから

「あなたってお兄さんがいたの?」

「いるよ。」二ヶ月は訳あって顔会わせてないけど。名前はハリーだよ」

「……ハリー・ポッター」

「そう。ハリー・ポッター。『例の人』を倒して額に有名な傷を持ったね」

「す、」「いやない! 有名なお兄さんがいて」

「そうかな? ベつに兄さん自身もつい最近知ったみたいだし、漏れ鍋には行つただけでも大騒ぎだつたよ。僕はあんなの『ごめんかな。少なくともいいから友達と話してる方がいい』

「ふふ。あなたって面白いわね」

何か知らないだけで笑われてしまった。
ちょっと心外だ。

でも、この子なんか可愛い。

容姿ももちろんだけど、雰囲気的に。

「じゃあ、私があなたの友達になつたら話し相手になつてくれる?」

「それはもちろん」

「じゃあ、これから7年間ようじくね」

「うわーうわー」

差し出してきた右手を握り握手する。

そのときの彼女の笑顔は反則的に可愛かった。

こうして僕は初めての女の子と友達になれた。

そして、ちょうど話し終わる頃にまた扉が開く。

そこには丸顔の男の子が泣きべそをかいて入つて来る。

「『』めんね。僕のヒキガエル見かけなかつた?」

「見かけてないよ」

「私も見てないわ」

「やっぱりになくなつたんだ! 僕から逃げてばっかりいるんだ!」

「何なら探してあげよつか?」

「いいの?」

「いいよ。それからここからでもすぐできるし。君の名前とヒキガエルの名前を教えてくれる?」

「僕はネビル・ロングボトム。ヒキガエルはトレバーッて言つんだ」

「あつがどつ『トレバー、聞ひえる？　聞ひえたたら返事して』」

『聞ひえるが、誰だ？』

『僕はジン・リー。君の主様、ネビル君に頼まれて探してゐるんだ。もし良かつたら戻つてくれないかな』

『いいぞ。私も主の場所が分からなくて困つてたのだ。今は一番先頭の車両にいるから、迎えにきて欲しいと云ふでくれ』

「『』解『ネビル、一番先頭の車両にいるみたいだから迎えに行つてあげて』

「あつがどつ…』

そうこうて走つてこつてしまつた。

「ねえあなた、どうやつて見つけたの？」

「話して居場所を聞いただけだけ」

「カル語しゃべれるの？　私にはゲコゲコ言つてただけにしか思えなかつたんだけど」

「そりだよしゃべつてたよ。ちょっと距離があつたけどこねへりこなんて事ないぞ」

「すいわね」

「そんなことないよ。これは特技みたいなものだからね」

僕らは汽車がホグワーツに着くまで話をしたり、どの組に入りたいかなと話した。

ハーマイオニーとはこれからも仲良くやつていけそうだ。
それから、「かわいいね」と言つたら頬を少し紅く染めていた。
あんまり慣れてなかつたのかも。

汽車が停車し、降りたときには外はもう暗く寒かつた。
やがて、ハグリッドが来て僕らを湖まで案内する。

そこにはいくつかの小舟があり、4人1組で乗るみたいだ。

ハーマイオニー?と、誰かわからない子2人と乗り込み、船はハグリッドの掛け声とともに鏡のような湖面を滑るように進む。

みんなが目の前の大好きな城を黙つて見ている間、僕は湖に顔を入れ水中人に挨拶をしていた。

とてもいい人たちばかりですぐ仲良くなれ、城につく時には「また今度遊びに行くからね」と言つ。

湖面から顔を上げるとハーマイオニー?が何をしていたのか聞いてきたので、そのまま答えたたら大きな声を上げたので目立つて仕方がなかつた。

そして、やつとホグワーツについたのだった。

組み分け

唐突だけど、兄さんに会いに行くの忘れていた。
兄さんも会いには来てくれなかつたけど。

それでも一応入学するまでに挨拶の1つくらいはしたかった。

「マクゴナガル教授、イッチ年生の皆さんです」

「1)苦労様、ハグリッド。ここからは私が預かりましょう」

先頭を行つていたハグリッドが声をかけた人はエメラルド色のローブを着た背の高い魔女だつた。

いかにも厳しそうな雰囲気を出している。

「ホグワーツ入学おめでとう。新入生歓迎会がまもなく始まります
が、大広間の席につく前に、皆さんに入る寮を決めなくてはなりません。
寮の組み分けはとても大事な儀式です。ホグワーツにいる間、
寮生が学校での皆さんの家族のようなものです。教室でも寮生と一緒に
一緒に勉強し、寝るのも寮、自由時間は寮の談話室で過ごすことにな
ります。寮は4つあり、それぞれ輝かしい歴史があり、偉人や魔女
や魔法使いが卒業しました。ホグワーツにいる間、皆さんの良い行
いは、自分の属する寮の得点になりますし、反対に規則違反したと
きは寮の減点になります。学年末には、最高得点の寮は大変名誉ある
寮杯が与えられます。どの寮に入るとしても、皆さん1人1人が
寮にとつて誇りとなるよう望みます。まもなく全校列席の前で組み
分けの儀式が始まります。待つている間、できるだけ身なりを整え
ておきなさい」

マクゴナガル先生は赤毛の男の子と、ヒキガエルを探してあげた男の子の方を見ていた。

彼らは、そそくせと身なりを整える。

「学校側の準備ができたら戻ってきますから、静かに待っていてください」

先生がいなくなつた。

瞬間周りの人たちは、ガヤガヤとビックの寮に入りたいとか、どうやって組み分けをするのかとか、話し始める。

その中に僕は兄さんを発見した。

「兄さん」

「つおつ。おどかすなよ、ジョレリー。汽車に乗つてたなら挨拶の一つくらこしごこごよ」

「じめんね。だから、いま声かけたんだけど」

「君誰?」

兄さんの隣にいた赤毛の男の子が聞いてくる。

「じこつは僕の弟、ジョレリーだ」

「僕はロン・ウイーズリー。よろしく」

「じかり。…………じゃあ、僕もつあつちに行くな。友達がいるんだ」

そう言つて、ハーマイオニーのいる方に戻る。

「どうだった、お兄さんは？」

「元気そうだったよ。友達もできたみたいだし」

「そう。良かつたわね」

それから少しばかり時間が経ち、マクゴナガル先生がやってきた。

「さあ行きますよ。組み分けの儀式がまもなく始まります」

と、厳しい声で言つ。

みんな結構緊張しているようだ。

僕は知つてゐるからそんなことはないし、ワクワクしているくらい

だった。

ハーマイオニーには組み分けの仕方を教えてあげたんだけど、どの寮に入るかで緊張しているようだ。

「さあ、1列になつて。ついてきてください」

マクゴナガル先生がスタッタと歩いて行く。

僕らは、玄関ホールを通り、そこから二重扉を通り大広間に入つた。

そこには、夢でも見たことのない、不思議で綺麗な空間が広がつていた。

何千とこつもつとくが空中に浮かび、4つの長いテーブルを照らす。

テーブルには上級生たちが着席し、キラキラ輝く金色のお皿と「！」レットがある。

広間の上座にはもう一つ長いテーブルがあり、先生が座っていた。

マクゴナガル先生は、上座のテーブルの所まで引率し、上級生に顔を向け、先生に背を向ける格好で1列に並させた。

「本当に空に見えるように魔法がかけられているのよ。『ホグワーツの歴史』に書いてあつたわ」

ハーマイオニーが説明してくれる。

けれど、それを聞くよりも椅子の上の帽子に興味が映っていた。
つぎはぎの、ボロボロで、とても汚らしい帽子だ。

これが組み分け帽子かと、感心する。

こんな姿になつても、組み分けをするといふのがかつてない。

そして、その帽子がついには歌いだしたのだ。

それが終わると、広間にいた全員が拍手喝采をした。

4つのテーブルにそれぞれお辞儀をして、帽子は再び静かになる。

帽子の歌はとても興味深い内容だった。

母さんの本によると、毎年歌詞が違つらじい。

まあ、内容はあまり変わらないようだが。

こつして組み分けは始まつた……。

「名前を呼ばれたら帽子をかぶつて椅子に座り、組分けを受けてください。アボット・ハンナ！」

マクゴナガル先生の生徒を呼ぶ声とともに、ピンクの頬をした、金髪のお下げの少女が、転がるように前に出てきた。
帽子をかぶると目が隠れるほどだ。

椅子に腰をかけた。

一瞬の沈黙……

「ハツフルパフ！」

と帽子が叫んだ。

右側のテーブルから歓声と拍手が上がる。

それから、何人もの人が続々と呼ばれ、寮が決まって行く。

一瞬で寮を言い渡すときもあれば、沈黙が長いときもあった。

そして、ハーマイオニーの名前が呼ばれる。

走るようにして椅子に座り、待ちきれないようにグイッと帽子をかぶつた。

「グリフィンドール！」

彼女は満面の笑みを浮かべグリフィンドールのテーブルについた。
そのとき僕に向かつて微笑んできたのは氣のせいだろうか。

彼女は汽車の中でグリフィンドールに入りたいと言っていた。

ただその資格があるのか不安だとも言っていたのだ。

僕はそんな彼女に、自分が行きたい所をしっかりと帽子に伝えれば良いと助言した。

そしたら、帽子もしつかりわかつてその寮に入れてくれるよと受けたした。

彼女は数刻考えるような表情をしてから、それまでの憂いがなかつたように元気になつたのだ。

そんな彼女が念願の寮に入れてよかつた。

そしてまた順々に名前が呼ばれついに兄さんの番がくる。

「ポッター・ハリー！」

兄さんが前に進み出ると、突然広間中にシーツといつわせやきが波のように広がつた。

「ポッターフ、そう言った？」

「あのハリー・ポッターなの？」

広間の人たちは兄さんを好奇の視線で見ていた。
いや、動物園のライオンを見るような目かもしれない。

ただ、それだけ「ハリー・ポッター」という名前は有名なんだろう。

兄さんが帽子をかぶる。

「フーム」

低い声で兄さんに聞こえるくらいで帽子が言つ。

音使いの修行で小さい音でも聞こえるよになつたからわかる。

「むずかしい。非常に難しい。ふむ、勇氣はある。頭も悪くない。才能もある。自分の力を試したいといつすばらしい欲望さえ持つている。いや、おもしろい……さて、どこに入れたものかな？」

「スリザリンはダメ。スリザリンはダメ」

と兄さんは繰り返している。

なんでスリザリンはダメなんだろう？

来るまでに何かあつたのかな？

「スリザリンは嫌なのかね？ 確かかね？ 君は偉大になれる可能性があるんだよ。その全ては君の頭の中にある。スリザリンに入れば間違いなく偉大になれる道が開ける。嫌かね？ 良いかも？ どっちにする？ 悩むな、少年よ！ どちらだ！ そうか……なら、グリフィンドール！」

兄さんは帽子を脱ぎグリフィンドールの席にフラフラと歩いて行く。そして、今までで最高の割れるような完成に迎えられていた。

「ポッターを取つた！ ポッターを取つた！」と、さつき見たこと同じ赤毛の双子が叫んでいた。

兄さんは有名人だな。

組分け1つでこんだけ騒ぎになるなんて。

次は僕の番だ。

「ポッター・ジェレミーー！」

マクゴナガル先生が僕の名を呼ぶと兄さんのとれとは逆にかなり騒がしくなった。

「ポッターフ、え!? 何で2人?」

「兄弟?」

「どういふこと?」

みんながみんな僕の存在に疑問を持つてゐるようだ。まあ、兄さんよりかなり知名度が低いから当たり前かも知れないけど。

そんな中、スタスタ椅子まで歩き帽子をかぶる。

「これまた、難しい。さつきより難しい。勇気もあれば、才能もあり、頭も良い。加えて優しくもある。それに嫉妬と欲望。兄さんに勝ちたい、有名になりたいか……。どこが良い? お前ならどこでも偉大になれるぞ」

「ならスリザリンにして欲しいな。好きな先生がその出身なんだ」

「いいのか? お前の父さんも母さんもグリフィンドールだったぞ」

「べつにいいよ。それに兄さんがいるし」

「ならば決まりだな。スリザリン!」

スリザリンの席の上級生からは歓声と拍手で迎えられた。

僕はハーマイオニーの方を見て微笑み、駆け足でスリザリンの席に行く。

僕の座つた横には制服を買った店であった子がいた。

「マルフォイ君もスリザリンなんだね。これからよろしく」

「ああ。君はポッターなのかい?」

「『例の人』を倒したのはグリフィンドールに入った、兄のハリー・ポッターだよ。僕はその弟」

「そうだったのか。話にあまり聞いたことがなくてびっくりしたよ」

「そうだろうね。まあ、この話しさはすぐに広まるはずだ。たぶん兄さんにみんな聞くはずだからね」

「有名人も辛いもんだろ?」

僕は頷く。

ちょうど他の人の組分けも終わり、校長先生が歓迎の挨拶をする。そして、彼の挨拶が終わると同時に杖を一振りして、目の前にある大皿を食べ物でいっぱいにしてみせた。

「この人すごいな。

母さんの本にもダンブルドア先生は『とにかくすごい』と書かれていた。
納得だ。

「うして宴は始まる……。

僕と兄の関係

料理があらかた食べられる、今度はテザート山がでてくる。

料理を食べている間僕のことが話題にあがつた。

兄さんとの関係。

どんな所で育つたか。

両親はどうなのか。

『例の人』から生き残つたこと。

まだまだたくさん質問された。

途中答えづらいうのは言葉を濁しながらも、しっかり答える。

けれど、誰が言つたのかわからぬがこの一言は心にまつすぐ突き刺さってきた。

「君つてお兄さんがいなければ死んでたんだ。なんで生き残つてるの？」『例の人』の汚点のままじゃん。スリザリンに入つたんなら死んでよ」

どうしてこんなこと言つの？

もちろんこの人以外のほとんどの人が気にすることないよと言つてくれた。

そして、言つた誰かを注意していた。

僕はそのとき兄さんと僕の関係つて何なんだろうって考えてた。

生き残つた兄弟。

有名人の兄と普通以下な弟。

優遇される兄と相手にされない弟。

それは、光と影。

でも、でも、でも、僕は囚われない。

おりの中にはもう閉じ込められない。

ホグワーツという飛ぶ立つための場所に来たのだ。

ここで僕は光になる。

そのための力だって手に入れる。

仲間だつて。

だけど、そこに兄さんはいなくて良い。
いや、いてはいけない。

僕は兄さんと決別する。

これからはただの同じ学校に通う一年生。

僕だけの決断。

ただの決意。

兄さん……いや、ハリーに伝える。

今の僕の気持ちを。

この決断を。

そうだ、それでいい。

意識が外に向く。

僕は俯いてぶつぶつ言っていたようで、ずいぶん落ち込んでいたようになっていたよ

周りの席の子たちが心配してくれている。

「だいじょうぶだよ。心配してくれてありがとう」

これからこの寮にいる人たちが家族なんだ。
僕のことを心配してくれる。

ただそれだけのことなのに、とっても胸があたたかくなつて。

やつと自由と家族を得られた気がする。

「エヘン　全員よく食べ、よく飲んだことじやろうから、2言、
3言。新学期を迎えるにあたり、いくつかお知らせがある。1年生
に注意しておくが口内の森に入つてはならん。これは上級生にも、
何人かの生徒たちに特に注意して置く。

管理人のファイルさんから授業の合間に廊下で魔法を使わないよ
うにという注意があつた。

今学期は2週目にクティッチの予選がある。寮のチームに参加し
たい人はマダム・フーチに連絡してくれ。

最後じゃが、とても痛い死に方をしたくない人は今年いっぱい4
階の右側の廊下に入つてはならん」

残念。森に入つてみたかったのに。
魔法生物なら怖くないんだけどな。
それでもダメなのかな？

今度スネイプ先生に聞いてみよう。

あと4階の廊下には何があるんだ?
これも聞いてみようかな。

「では、寝る前に校歌を歌おうかの。みんな自分の好きなメロディ

ーで。では、さん、し、はい！

みんなバラバラに歌い終えた。

とびきり遅い葬送行進曲で歌つていた赤毛の双子が最後まで残つていた。

僕はといえば音使いのスキル練習もかねてここにいる人たちが幸せな気分になれるように歌つた。

近くの席にいた人々は何故かこちらを向いている。
もしかして、下手だったのかな？

まだ、僕の歌誰にも聞いてもらつたことなかつたからそうなのかも。

「僕の歌下手だつた？」

「そうじゃないわよ。とてもうまかつたわ。みんなあなたの声に感動してたのよ」

「そうだつたんだ。嬉しいな！」

隣にいた女の子に聞いてみると褒められた。

でも、頬を紅くしてたから、熱でもあつたのかな。
長旅で疲れたんだろう。

そうに違ひない。

こうして宴は幕を閉じ、僕たちは監督生と呼ばれる上級生につれられ寮に行く。

入つすぐの所は談話室となつていて、とても居心地が良さそうだ。
ふかふかした肘掛けの椅子もたくさんある。

そして、所々ヘビをあじらつた模様が入つていてかっこ良い。

監督生の指示に従い女の子は女子寮に続くドアから、僕ら男は男子寮につながるヒドアからそれぞれの部屋に行く。

階段を上つて行くと緑色のビロードのかかた、4本柱の天蓋付きのベッドが5つ置いてあった。

その5つの内1つにマルフォイがいたのはとっても嬉しそうだ。

けれど、クタクタに疲れた僕らにはしゃべる元気もなく、みんなパジャマに着替えるとすぐに寝ていた。

僕も3分と立たないうちに夢の世界に飛び立つて行くのだった。

必要な部屋

翌日、目を覚ますとまだ口が昇りかけで窓の外は薄暗い。

まだ他のルームメイトは寝ているみたいだ。

そんなわけで左手のブレスレットから糸を出していく。

目に見えないほどの細い糸は僕の手によつて縦横無尽に校内を駆け巡る。

その糸からは、どの先生が何をしているかなど手に取るとうにわかつた。

けれど、ハーマイオニーとハリーしか良く知らないから、生徒の動きまではわからない。

友達のことだけわかればいいか。

そんなわけで、ハーマイオニーだけ少しばかり糸を集中させた。

そういうしていふうちに太陽はしっかりとのぼり、朝を告げている。ルームメイトの子たちも目を覚まし始めたようだ。

今日から勉強頑張らないと！ と気合いを入れ制服に着替え始めた僕だった。

魔法史、薬草学、妖精の魔法と授業を受けたのだが、正直退屈だ。どれもこれも、教科書を見たら全部のついているからだった。だから、授業中に半分ほど教科書を読み進めてしまったのだ。これなら他の授業も簡単だなと思ったが、その予想は外れてしまつ。

それは、変身術の授業のことのことだ。

「変身術は、ホグワーツで学ぶ魔法の中でもっとも複雑で危険なもの

の一つです。いい加減な態度で私の授業を受ける生徒は出て行つてもらいますし、2度とクラスに入れません。初めから警告していくおきます

教室に入つて早々こんなことを入れた授業は初めてだ。それから、机を豚に変え、またもとの姿にしてみせた。

周りはみんな感動していくはやく試したくてウズウズしていくようだ。

「しかしみなさん。これができるようになるにはまだまだ時間がかかります。何も知らないあなたたちでは早くても3年かかるでしょう。何なら試してみますか？」

この一言は教室の空気を沈めるには十分な威力があった。でも僕はものは試しと、

「僕やつてみます！」

そういうて、先生と同じように杖を振り、イメージする形に魔力を込める。

杖から銀と紅の光が放たれ

「……………おしかつたですね、ミスター・ポッター」

俺が変えた机は、足以外は豚になつたのだ。
動けない豚もとい机は何とも哀れだつた。
けれど、クラスメイトは腹を抱えて笑つてゐる。

どこにうける要素があつたのかな？

そのあとマクゴナガル先生は元に戻しスリザリンに3点をくれた。

「今回のミスター・ポッターのよつて変身術は一歩間違つと今回のよつになります。だから、むやみやたらに使つてはなりません。しつかりと授業を受け内容を理解し、しつかりと練習していきましょう」

時間が流れるのは早いものだ。

つこさつきまで授業を受けてたかと思つともう夜になる。

今日の夜中必要な部屋に行こうかと思つ。

見回りの先生などもわかっているから怒られることはないはずだ。それに入学翌日で規則を破るなんて思つてもみないだろ？

そんなわけで夜も良い感じで更け、口笛を吹きながら談話室から廊下へとれる。

『ジョンレニー・ポッター作曲 NO.3 迷路』

音使いのスキルを使った認識阻害。

口笛が聞こえるものはそこにいると認識できなくすることができる。

回転する階段や隠し扉などホグワーツをそれなりに知つてはいるからなんの苦もなく目的の場所までたどり着いた。

そこで、訓練できる時間と場所が欲しいと心のつちで言しながら3回ほど往復する。

すると、並んで2人ほどしか入れないほどの扉が表れ、急いで中にに入る。

中は4つの部屋に別れていた。

まず右の扉から1つ目の部屋に入れる。

1つ目の部屋から2つ目の部屋に入る。

2つ目の部屋から3つ目の部屋に入る。

3つ目の部屋から4つ目の部屋に、そして左の扉からである。

そして1つ目の部屋には砂時計と一枚の紙が机にぽつんと置かれて
いる。
なんだ？

『逆転時計　一度ひっくり返すと1時間時が戻ります。
自分に自分が見られないように使いましょう』

と書かれていた。

とりあえずうまく過去の自分に見つからないようにすれば良いんだ。
それと、誰かいても見なければ良い。

20時間仮眠も取りながらしっかりと修行と勉強ができました。

そして、朝はまた始まる。

森の中には動物の鳴き声はおはようと言つてゐる。

フクロウは手紙をくわえているから鳴けない。

太陽はサンサンと光りを降り注ぐ。

疲労感のたまたま身体をほぐしながら見る朝のホグワーツはとても
綺麗だ。

魔法薬学の先生

今日はグリフィンドールと和睦で初めての魔法薬学の授業がある。スネイプ先生の授業を受けられることがあって今日の朝食は昨日の3倍食べた。

そして、いま教室とに来てている。

まあ、地下牢なんだけれどね。

他の教室よりも寒いし、壁にはガラス瓶の中でアルコール漬けの動物がふかぶかしている。

その教室を見渡してみると、少し離れた席にはハーマイオニーがハリーの隣に座っていた。

なんで？

そう思つたとき、ちよづき先生が扉を開けて入ってきた。

まず、他の先生と同じように出席を取り、ハリーの名前の所でとまつた。

「ああ、さよう。ハリー・ポッター。我らが新しい　スターだ」

猫なで声でハリーに向かつて言つ。

マルフォイはいつも隣にいる子と、冷やかしを込めてわらう。
僕はただ先生の顔をずっと見ている。

先生の顔は冷たくて、うつりで、暗いトンネルを思わせるように見えるが、よくよく見ると、小さくだがたたかく優しい光をともしていた。

ただ、僕を見ている時だけなのかも知れないけど。

「このクラスでは、魔法調剤の微妙な化学と、厳密な芸術を学ぶ。杖を振り回すような馬鹿げたことはやらん。そこで、これでも魔法かと思う諸君が多いかもしだれん。フツフツと沸く大釜、ユラユラと立ち昇る湯気、人の血管の中をはい巡る液体の纖細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力……諸君がこの見事さを芯に理解することは期待しておらん。吾輩が教えるのは、名声を詰めにし、栄光を醸造し、死にさえふたをする方法である。ただし、吾輩がこれまでに教えてきたウスノロより諸君がましであればの話しだが」

大演説のあと、教室は静まり返っていた。

先生のこの言葉は魔法薬学とは何かを語り、その資格を見極める。と、言いたいのだろう。

ならば、僕は必ずその期待に応える。初めてあつた日にもそういうから。だから、昨日は必死に勉強した。

一夜漬けかもしれないけど、それなりには覚えた自身はある。ウスノロではないと先生に早く理解してもらいたくてウズウズしている。

それと、僕と同じようにもう一人ウズウズしている人がいた。

それは、ハーマイオニーだ。

彼女は列車の中で話した限り、かなりの勉強好きでありながら、天才でもあった。

「ポッター！」

と、突然先生が呼んだ。

「はい！」

「ジヒーリー、お前ではない。ハリー・ポッターの方だ。ポッターはお前の兄さんの呼称だ」

そういうて、咳払いをしながらハリーの方を向く。

「アスフォーテルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると何になるか？」

ハリーの頭には？マークがいくつも浮かんでいたように見える。そして、赤毛の子、たぶんロンをチラッと見ると、「降参だ」という顔をしていた。

ハーマイオニーは空中に高々と手を挙げている。

「わかりません」

「チツ、チツ、チ 有名なだけではどうにもならんじ!。
ではもう一つ聞こいつ。ベゾアール石を見るけて来いといわれたら、
どこを探すかね?」

ハーマイオニーはさつきよりも高く、椅子に座つたままの限界まで手を挙げている。

ハリーには何がなんだかさっぱりなんだらう。顔に書いてある。

「わかりません」

「クラスにくる前に教科書を開いてみようとは思わなかつたわけだ
な、ポッター。え？」

最後だ、モンクスフードとウルスベーンとの違いは何だね？」

「わかりません」

ハリーは落ち着いた口調で言った。

ハーマイオニーは立つてまで手を挙げていた。
少し落ち着いたほうが良いんじゃないかな。

「では、ジョン・スリザリン 答えてみなさい」

「アスフォデルと、ニガヨモギを合わせると、眠り薬になるはずです。ただ、あまりに強力なために『生ける屍水薬』と言われています。ベゾアール石は山羊の胃から取り出す石で、たいていの解毒剤になります。モンクスフードとウルスベーンは同じ植物でトリカブトのことを指します」

「正解だ。スリザリンに5点」

記憶力には自信があつたけど、答えられてよかつた。

「諸君、何故彼が言つたことをノートに取らない？　お前たちは答えられたのか？」

先生がすじむように言つて、すぐに羽ペンを出し書く音が教室中に広がる。

ただハーマイオニーだけは書いていなかつた。
たぶん覚えているからだろつ。

その後、魔法薬の授業は順調に進んだ。
ただ、グリフィンドールの扱いがスリザリンに比べれば少し悪い気がしたが気のせいだらう。

ハリーは良く当たられ、間違えてマルフォイたちに笑われていた。

ハリーはスター（笑）だね。

顔を歪めて僕を睨んできているが知らん顔をする。
だって、教科書読んでこない方が悪いんだから。

カエルの子 ネビルが大鍋を溶かし、教室が一時騒然とした。
そのとき先生はとっさに生徒をかばい、すぐにこぼれだした薬を消した。

「君、ポッター、針を入れてはいけないと何故言わなかつた？ 彼
が間違えれば自分がよく見えると考えたな？ グリフィンダー
ルは1点減点する」

ハリーならやるんじやないかと思つ。

思い出せばいつも僕の作品がハリーのよりよいと壊されていた。
その時は兄さんがするはずないと思つていたから仕方ないかもしれ
ないが、今となつてはちょっと力チンとくる。
でも、先生が注意してくれたからいつか。

こうして、初めての魔法薬の授業は終わつた。

僕の友達マルフォイ

入学してから幾日か過ぎ、慌ただしかった日々もよしやく落ちつきを取り戻してきた。

授業の方も何ら問題なく、修行の方もあと少しで完成といつ所まで来た。

ここ最近 7 時間 × 8 回 = 56 時間でやったかいがある。

そんな中僕は仲の良い友達ができた。

それは、洋装店でもあつたことのあつたマルフォイだ。

ハリーのことを笑つたり、子分を従えて高圧的な話し方をするが対等な立場の友達には普通だつた。

グリフィンドールが嫌いや、純血が優れているなどは親かいわれ続けたからみたいだ。

もし、うつかりべつに純潔でなくともいいなどいった日には父親にこつてりお仕置きされるみたい。

話しを聞いているうちに何か不憫に思えてきたりした。

彼は本当はとてもやし優しいひとなのだ。

ただ、育てられ方を少し間違えただけ。

何となく僕に似ているなと思う。

まあ、そんなことがあつたのだが、今は飛行訓練に行く途中だ。

マルフォイが寝る前などに話してくれたのだが、1年生がクイディッチ・チームの寮代表選手になれないなんて残念だと言つていた。危ない競技だから仕方ないといえば仕方ないかも知れないけど、あんまり納得したくない。

決まりだから仕方ないことだけど。

それにしてもクイディッチは魔法界では人気みたいだ。
魔法使いの家計の子はみんなその話を良くする。

いつから篲に乗り出したとか、どこのチームの誰が好きだとか。
僕としても篲には早く乗つてみたかった。

それが今日叶うのだからとてもワクワクしている。

一応、図書館であつたハーマイオニー、「クイディッチの本知らな
い?」と聞くと『クイディッチ今昔』という本を紹介され読んだ。
なかなか面白くて一気に読んでしまった。

その中にスニッチがスニジェットと呼ばれる鳥が使われていたと書
かれおり、今度必要な部屋でスニジェットを呼び出してみようと思
つた。

校庭につくと既にほとんどの生徒がいる。
よく晴れた少し風のある日で、足下の草がわざわざ波立つている。

そんな芝生の上に20本の篲が並べられていた。
その一本の横に立ち、ぱーっとしながら数分待つているとかけなが
らやつてくるハリーとロンの姿が見える。
そのままあとは、まだム・フーチがやって来た。
白髪を短く切り、鷹のよくな黄色の目をしている。

「何をぼやぼやしているんですか

開口一番にハリーたちをお叱りになっています。
手のかかる生徒がいると、先生も大変なんだな。

「みんな篲の側に立つて。さあ、早く」

そういうて散り散りになつていたグリフィンドールの生徒が箒の側にすぐ集まる。

「右手を箒の上に突き出して」

先生が掛け声をかける。

少し古そなうだがまだまだ現役で頑張れるぞといった感じの箒に手を向ける。

「やして『上』がれ！」と叫ぶ

「「「「「上」がれ！」」「」「」

とこうみんなの叫び声が中庭に響きわたる。

僕の箒は呼びかけに答えるかのようにすぐに手の中に収まつた。無意識的に音使いのスキルを使つたようにすんなりできたので驚いた。

周りを見るとマルフォイは2回目で成功。

ハーマイオニーの箒は地面をコロリと転がり続けていたが、十数回を数えた頃には手に収まつていた。

次に先生は箒の端から滑り落ちないように箒にまたがる方法をやってみせる。

一発合格の僕だったが、マルフォイは間違いを指摘され顔を真っ赤に染めていた。

ただ、それでも間違いをしつかり直し次は間違いによつてする姿勢はとってもかつこ良かつた。

それを笑うハリーとロンがいたが、逆にその姿を見て笑つて内心笑

う。

「さ、私が笛を吹いたら地面を強く蹴つてください。箒はぐらつかないように押さえ2メートルくらい浮上して、それから前屈みになつてすぐにおりなさい。笛を吹いたらですよ 1、2の」

といひがネビルが笛が鳴る前に地面を強く蹴つてしまつ。

「ひひ、戻つてきなさい…」

先生の声をよそに、ネビルは上昇をし続け真っ青な顔のネビルが声にならない悲鳴を上げ、箒から真っ逆さまに落ちた。
そして……

ガーン！ ドサツ、ポキッといつ音をたてて、ネビルは草の上につぶせに墜落した。

先生はネビルと同じくらい真っ青になつて、

「ああああ、ネビル、大丈夫。立つて」

そつと抱きかかえられる。

「私がこの子を医務室に連れて行きますから、その間誰も動いてはいけません。箒もそのまま置いておくよ。さもないと、クイディッチのクを言つ前にホグワーツから出て行つて貰いますよ」

僕たちに向けてこう言つて去つて行つた。

2人の声が届かない所まで行つたとたん、マルフォイは笑い出した。

悪い癖がでたなと思つた瞬間には、

「あいつの顔見たか？　あの大間抜けの」と、言つてしまつ。

面倒ことになりそうだ。

特にグリフィンドール、スネイプ先生曰く勇敢バカがいるから……。

理不^{タク}なこと

「おー、こんな所にロングボトムのばあちゃんが送ってきたバカ玉があむじゅねえか」

そつまくへ、草むらの中から『隠して出しだま』を拾こだした。

「マルフォイ、うわへ渡してもいいね」

ハリーはの静かな声で、ガヤガヤといいた外野はおしゃべりをやめる。

「は？ 何だつて？」

「うわへ渡せー。」

「なんでだよー。」

「何でもここから」うわへ渡せー。」

ハリーとマルフォイが言ひ合ひをしてい。

ただこの状況を見ればハリーの方が理不^{タク}なことを言つていて、マルフォイは拾つてあげて返すつと思つてゐはずだ。

それを無理矢理渡せなんて……。

「それじゅ、ロングボトムがあとで取つてこられるといふと置いておくよ。せうだな」「うわへ渡せつたらー。」もつこい。渡してやる

ハリーの物言いにじびれを切らしたであつたマルフォイは思い出しだまを思いつきり投げた。

僕は思う。

ハリーはたぶん自分がネビルに渡して何か得しようって魂胆だ。僕がおじさんたちの家にいた時のような顔をしている。

だからマルフォイのしたことは仕方ないと想う。

「ダメ！ フーチ先生があつしゃつたでしょ、動いちやいけないつて。私たちのみんなが迷惑するの！」

ハーマイオニーの叫び声がする。
上空を見上げると、ハリーが簫にまたがり思い出し玉めがけて飛んでいた。

周りの女の子たちが息をのみ、キヤキヤー言つ声、ロンが感心して歓声を上げている。

うるさくて仕方ない。

ハーマイオニーの言つていることがもつともだつてのこ。

それでも、ハリーは簫の使い方が感覚でわかっているようごどんごとん加速し 地面につく間一髪の所で玉をつかんだ。

その後簫を引き上げ、水平に立て直し、草の上に転がるように軟着陸した。

思い出し玉をしつかりとのひらに握りしめたまま。

「ハリー・ポッター……」

ハリーは何とも誇らしげな顔だった顔が急に青ざめながら声の方を

向く。

そこにはマクゴナガル先生がいた。

「まさか　こんなことホグワーツで一度も……」

先生はショックで言葉もでなかつた。
眼鏡が激しく光つてゐる。

「……よくもまあ、そんな大それたことを……首の骨を折つてたかもしけないのに　」

「先生、ハリーが悪いんじゃないんです」

「お黙りなさい。ミス・パチル

「そうだそうだ。

悪いのはハリーだ。

なんでマルフォイが悪いんだよ。

あんな物言いで言われたら誰だつてキレるつて。

「でも、マルフォイが……」

「ぐどいですよ。ミスター・ウィーズリー。ポッター、さあ、一緒にこりつしゃい」

ざまあみろ。

マルフォイに理不尽なこといつたり、ハーマイオニーの言つて聞く
かないからこんなことになるんだよ。
罰則でもつけねばいいのに。

先生は大股に城に向かつて歩き出し、ハリーは麻痺したよつにとぼとぼついていた。

その後、ネビルを医務室に送つてきたフーチ先生はこの状況を見て、授業が説教で全部つぶれた。

こんなところでも、僕はハリーのとぼつちりを受けるんだ。

その日の夕食時、ハリーとロンが話しているのが聞こえてきた。なんで、言われたことやぶつて、1年生でなれないクディッチの選手になれるの？

こんなの絶対おかしいよ！

他の1年生にもチャンスを与えるべきだ！

マルフォイでつて家でやつてたつて言つし、なんでハリーばっかり！

有名だから？『例の人』を倒したから？

こんなのふざけてるよ…………。

僕とクイーディッチとハリー

今僕の目の前にはスネイプ先生がいる。

それは、何故ハリーが1年生でシーカーになれたのか聞くためだ。

「先生、なんでハリーだけ1年生でクイーディッチの寮代表になれるんですか？」

「マクゴナガル先生が校長を説得したからだ」

「それで、こんなに簡単になれるんですか？」

「いや、無理だな」

「じゃあ、なんで！」

「校長も特別扱いしているのだろう。『例の人』を倒した英雄だからな。世間的に見ればだが」

「先生はそうは思わないんですね」

「そうだ。あんなのが英雄なんて魔法世界も終わつたようなものだ」

「じゃあ、僕を手伝ってください。まず、今期の1年生全員に寮のクイーディッチのメンバー選抜の権利が欲しいです」

「当たり前だな。ポッターだけがなれるなど不公平きわまりないな。ダンブルドア校長の所に行こうか」

「僕もですか？」

「やうだ。元々はお前の提案なのだろう」

「そうですね」

こうして、先生の部屋から校長室に向かっている。スネイプ先生と並んで歩くと親子みたいだ。少しばかりはなれている校長室まで歩くのは数分かかる。でも、その数分が今は幸福に感じられた。

「レモンキャンパー」

先生が校長室の前で呟く言葉を唱えると、ワシ型のガーゴイルの階段は僕たちを乗せて回る。

そうすると、立派な扉があり重々しい感じだった。

「校長はいります」

そういうて先生は扉を開けた。

そこにはいくつもの魔法具と書類や本。歴代の校長の額縁。

それと不死鳥。

先生の部屋とは違い、この部屋は威厳のある部屋だった。

「ジーニーを連れてどうしたのじゃセブルス？」

「校長！ 何故ポッターだけがクィディッチに1年生から参加できるのです！ あれは危ないからと1年生には禁止にしたのでしょうか

！」

「それはじやな、あやつなら大丈夫だと思つたからじや」

「それだけでですか！」

「そりゃ」

「校長先生、それはおかしいですよ。なんで校長先生が大丈夫だと思つたら良いんです？これは公平じゃありませんよ。1年生全員を見て、大丈夫か大丈夫じゃないかの判断をしてください」

「もう見ておる」

「嘘だ！ 前回の授業はハリー以外まともに箒に乗つていない。それでなんでわかるのです！」

「儂は何年も生徒を見てきた。何千人では足りん数をな。それだけ見ればあれだけでもわかる」

「それだけでなんて……おかしいよ……」

「セブルス、連れて行け。ここで何を話しても無駄じや」

「行くぞ！」

「ま、待つて下さい…………」

「なんで、なんで、なんで？」

「先生は僕の味方じやないの？」

まだ、僕は納得できない！

「いいからであるべ。話しほその後だ」

そう小声で言つて僕を校長室から引きずり出す。
そのあと、無言で先生の部屋までつれられた。

「ジヨレミー、校長はダンブルードアだ。わかるか？『例のあの人』
ですら唯一恐れた魔法使いだ。それは何故だと思う。それは経験と
豊富な知識から導きだされる策があるからだ」

「だからって、校長先生のいつてることはおかしいよ。それに、な
んで先生は説得をとてつだつてくれなかつたの！？」

「まだ、策はある。試合中にボッターを危ない状況に追い込めばい
いのだ。そろそろ校長も考えを改めざる終えない」

「そりゃ！ 1年生がでる権利を得るんじゃなくて、ハリーが持つ
てる特別な権利を剥奪すればいいんだ」

「そういうことだ。お前ならば簡単であらう。ばれずにやれ。私は
応援しているからな」

「はい、先生」

こうして、僕は部屋に戻った。

そうだ、これからはもっと修行と勉強を頑張らなきや。
万全を期すために、フェリックス・フェリシスを使おう。
そのためには作らなきや。

あと、篝に乘る練習もしようかな。

2年生からは寮代表になつてやる！

この日を境に、僕の必要な部屋を使う時間が5倍になつた。

ケロちゃん

あれから数日たつたある日、図書館でハーマイオニーと会つ約束をしていた。

彼女はハリーとロンとそれなりに仲が良いみたいだったが、彼らみたいにスリザリンを苦手とはしていないみたいだ。
もしかしたら、僕だけなのかもしけないが。

「やあ、ハーマイオニー。今日はどうしたの？」

「あのね、ジンレミー、ちょっと前なんだけど、立ち入り禁止にされている部屋に間違つてしまつたの」

少し深刻そうに、怯えるように彼女はいつた。

「そこにはね、ケロベロス三頭犬が眠つていたのよ。何かを守るみたいに扉の上に座つていたわ」

「そつなんだ。三頭犬かー、見てみたいな」

「今のを聞いた感想がそれ？ あなたらしいはね」

「そりかな？ 普通だと思つけど。でも、どうしてそんな所にいたのさ？」

「ハリーと、ロンがねマルフォイと夜中に決闘するとか言って寮から出て行くのをちょうど見たの。そんなことしたら寮の点数が減点されるじゃない？ だから私ついて行つたの」

「なんでもんな危ない」とするのも…。君までいたらもうと危ない
じゃない」

「べつに大丈夫よ。これでも私、魔法は得意なんだから

「それでも……」

「ありがとう。心配してくれて。やつぱりあなたが私の友達で良か
ったわ」

「本当にっ？」

「本当だよ」

「だったら、今度から危険なことはしないって誓つて。もし、する
んだつたとしても僕に絶対相談して」

「わかつたわ」

「ありがとう」

このあとは、魔法についてや学校生活とかたわいもない雑談をして
過ごした。

その夜、僕は必要の部屋ではなく、彼女の言った三頭犬のいる部屋
に向かっている。

いつものように口笛を吹きながら石造りの廊下を歩く。

カツンカツン

靴の音は廊下に反響する。
けれどそれも、夜の学校という不気味な空間にはとてもこもっており、また誰にも聞こえない音でもあった。
そこら辺は音使いのスキルが関係している。

たまに壁からでてくる「一ースト」には、瞬肝を冷やしながらも田舎の部屋へとつぶ。

「アロホモラ」

解錠の呪文を唱え扉を開けるとそこには床から天までの空間全部が三頭犬で埋まっていた。

頭が3つ、血走った3組の可愛らしいギョロ目。
3つの鼻がそれの方にひくひく、ぴくぴくしている。
3つの口から黄色い歯をむき出し、その間からヌメヌメとした繩のようになだりとよだれが垂れ下がっていた。

『ケロちゃん！ なんて情けない姿をしているんだ！ ちゃんと手入れはしないとダメ！ 僕が洗つてあげるからおとなしくしているんだよ』

『お前は誰だ！ ここから先は通さんぞ』

『そんなの今はどうでもいいよ。いい子だから僕の言つことに従つて。まずは、毛並みを整えなきゃね』

『じつこいつだ?』

『ケロちゃんはかつっこいんだからもつと身だしなみはしっかりしなきゃもてないよ。これから先ずっとここのわけばらないんでしょ?』

『やうだが……』

『勝手にやるからじつとしてね』

とつてもかつっこい三頭犬のケロちゃん(僕命ぬ)。
なんだかんだ言つて僕のいたことに従つてくれました。

魔法で身体と口の中、まるまる全部洗つて乾かして、毛並みを整えてキラキラ光るようになる。

見違えるよつな姿になつたケロちゃんは満足そつな顔で僕に言つた。
『ジョーレニーのおかげで生まれかわつたよつに綺麗になつた。この姿で外に出ればモテるだろ?。感謝する。その、なんだ、このお礼と言つては何だがこれからも定期的に洗つてくれるんであれば、何でも言つてくれ。俺のできる限りはしたやうつ』

『そつなの? じゃあ、僕とお友達になつてくれる? たまに来て話しても聞いてくれたら嬉しいんだけど』

『それくらい容易いことだ』

『その時はお友達連れてくるね』

『あ

今度くる時はハーマイオニーを誘てあげよう。
彼女のことだから興味津々でついてくるはずだ。
女の子と2人きりで夜に会うなんてドキドキだけどね。

まあ、こんことで、僕はケロちゃんと友達になった。

ケロちゃんとお友達になった次の日の朝、ハーマイオニーはそのことを報告しに行つたらとても驚いた顔をしたあと、あきれたようなそぶりも見せた。

「ジヨレミー、あなたって何者？ 三頭犬と友達だなんてありえないわ。それに、昨日あんなに私に危ないことするなつて言つておいで、あなたがしてるじゃないの」

「大丈夫だよ。僕こう見えても強いからさ。それに、ケロちゃんとは本当に友達になれたよ！」

「嘘に決まってるわ」

「嘘じやないよ！ じゃあ、今から行つてみない？」

「ダメよ。もうすぐ授業じやない」

「わかつたよ……じゃあ、今田の夜でどう？..」

「校則違反になるわ」

「もうしてるから大丈夫だよ。11時頃、グリフィンドールの寮の前に迎えに行くからね」

「仕方ないわね。行つてあげる」

「ありがとう」

僕らは今日の夜、ケロちゃんに会いに行くことになった。
楽しみだな、なんて考へてると近くから、

「二ンバス2000だつて！ 僕、触つたことやえないよ」

と、ロンの「ひりやましそうな声が聞こえた。
包みをもつてるのはハリー。

念願のおもちゃを手に入れたのかのように満面の笑みだ。

校則違反だろ？

内心そう思つた。

しかし、どうせ先生には許可の連絡がいつているとも思つ。

2人は急いで箒を見ようと、大広間から出て行く。
僕たちもついて行くように大広間をでる。

そこでは、マルフォイとハリーが口論をしていた。

「箒だ。今度こそおしまいだな、ポッター。一年生は箒をもつちや
いけないんだ」

まさしく正論だった。

けれど、フリット・ウイック先生の登場により彼は正しくなくなる。
特別には常識は当てはまらない。

「君たち言い争いじゃないだろ？」

「先生、ポッターの所に箒が送られてきたんですよ」

わざとらじこべてはひマルフォイ。

「いやー、いやー、そりしきね
ポッター、篋は何型かね？」

先生はハリーに笑いかける。

「マクゴナガル先生が特別措置について話してくれたよ。ところ
どポッター、篋は何型かね？」

「二ンバス2000です。実は、マルフォイのおかげでかつて頂きました」

ダドリーが昔僕に向けていた笑みと同じ顔をしてマルフォイに言つ。
怒りと困惑をむき出しにした顔をする。

当たり前の反応だ。

自分が正しい、この場合はたいていの生徒がそう思つことを、否定
されたのだ。

自信たっぷりに言つていれば、なおさらそうなる。

だから、マルフォイはそそくさと逃げるよつてその場をあとにした。

その姿を見るハリーとロンの必死に笑いをこらえる所を見ると、力
チンとくる。

「だつて本當だもの。もしマルフォイがネビルの思い出し玉をかす
めてなかつたら、僕はチームに入れなかつたし」

ふざけるな。

マルフォイはかすめたんじやない。

親切に拾つただけなのに、お前が暴言を吐くからだ。

「それじゃ、校則を破つて、」褒美を貰つたと考へているのね

隣にいるハーマイオニーが怒った声でいつ。

「あれつ、僕たちとは口をきかないんじゃなかつたの？」

とハリー。

「そうだよ。今更変えないでよ。僕たちにとつちやありがたいんだから

「早くこいつを連れて行けよ、ジェレミー。こんなやつはお前で十分だ」

ハリーが僕に言つてくれる。

言われなくて、そりするよ。

君たちにはハーマイオニーが友達だなんてもつたいたいなと過ぎる。

だから、ハーマイオニーの手をにぎりその場を離れた。

「気にしない方がいいよ。あの2人なんて最低なことを言つんだ」

「だ、だ、大丈夫よ。気にしてないから。それよりも……て……手を……」

「手がどうした？」

最後の方声が小さくなつて聞こえなかつた。
顔を真っ赤にしている。

ビリしたのかな？

わざわざまで怒つてたの……。

「何でもないわ。そろそろいかないと授業に遅れちゃうから行くわ。
11時頃寮の前で待ってるからね」

「わかったよ。また何かあつたら僕に言ひてね。相談ならこいつだ
って乗るからさ」

「あらがとつ

僕らは互いの授業の受ける教室へと歩き始める。
高鳴る胸が今か今かと夜を望む。
今日は楽しくなりそうだと思った。

夜のテート

約束通り11時少し前で、つむじ回り口笛を鳴らし、寮を見る。

歩くスピードがいつもより速い。

かつて知ったるホグワーツの中でも、お母さんの寮だったホグワーツの寮までまようことなどない。

ただ、早く行きたいと焦りながらもハーマイオニーに顔を合わせるのだから平常を保とうと頑張る。
だから平然と頑張る。

「どうもならないけど。

「んばんは」

「んばんは」

口笛を止め、足音で気配を消す。

「じゃあ、こいつか」

「やうね。校則を破るなんてありえないけど、あなたのやつていることの方がありえないわ。だから、私が見極めるの」

「ぐつこひこののは何でもいいにせど、ケロちゃんは可憐によ

「そ、そうなの。早く行きましょう。こんな所にいたらファルチさ

んに見つかっちゃう

「それはありえないから安心して。でも、速く行かないと、ケロちゃんと話す時間がなくなっちゃうね」

暗い中スタッフ歩く僕の後ろで控えめに必死になつてはぐれないよう、ローブの裾をギュッとまみるハーマイオニー。
彼女に会わせるように歩く早さを変えながら、安心させる口笛を吹く。

ゆっくり歩いたので、5分ほどかかつたがようやく立ち入り禁止区域のケロちゃんの部屋についた。

ドアの鍵を呪文で開け、

『「んばんは、ケロちゃん。友だちを連れてきたよ』

『良く来たな。この子は……前来たこともあるな』

「前に来たことあるのハーマイオニー？」

「え、ええ。ちょっと間違えて入ってしまったわ」

『そうみたいだね。まあ、偶然っぽいから許してあげてね』

『お前が言うのだから、許さう。べつに何もしていかなかつたからな』

「良かったね、ハーマイオニー。許してくれるって」

「や、そ、そ、う。ジヒュリー、あなたつてもしかして」の三頭犬と話しているの？」

「やうだよ。『ケロリヤん、彼女のしゃべってる言葉しゃべれる?』

「

「ああ。これで良いか?」

「これで良じよね? ハーマイオニー」

「ええ。は、初めまして、ハーマイオニー・グレンジャーです。どうかよろしくお願ひします」

「礼儀正しい子だな。悪そうな気配はしない。ただ、好奇心が少し強いみたいだな。まあ、良い」

「あつがといれこまく」

「そんなにかしりある必要なんてないよ。ケロリヤんも堅苦しいの嫌いじゃない?」

「やうだな。ハーマイオニーとやら、ジヒュリーとおなじよつて接しろ」

「はー」

彼女の顔はこわばつたままだった。

けれど、少しばかり落ち着いたのである。三頭犬がこうしてしゃべれるなんて知らなかつただろうじ、好意的だ。

僕もしゃべれるなんて知らなかつたけど、ハーマイオニーがケロちゃんに気に入られてよかつた。

1時間ほど、ハーマイオニー?が質問をして、ケロちゃんが答えると、いうのが続いた。

その後は、ケロちゃんの背中に乗つたり、ブラシで毛並みを整えたりそんな感じで時間は流れてくれる。

その中で、ハーマイオニー?ともつと仲良くなれた。

「マイ」と少し変わつていて、「彼女のことを呼ぶことになったのだ。逆に彼女は「レミー」と僕を呼ぶようになった。いわゆる愛称。

まあ、ケロちゃんは、ケロちゃんのままだけど。

とっても有意義な時間だったと思つ。

1時を過ぎた頃彼女のあぐびが多くなりはじめたので、ケロちゃんとお別れをして、寮に送つて行った。

「今日は貴重な体験だつたわ。私の知つてた本の世界つて狭いのね。このままレミーとケロちゃんに会わなければ頭でつかになつたと思つわ。ありがと」

そういうつて、彼女は寮に戻つた。

僕も寮に戻る。

そろそろ、修行も大詰めだな。
頑張らないと思つ。

でも、彼女の笑顔は最高だつたな。

さつきの彼女のありがとうと笑顔は彼の脳内に一生忘れることなく
刻まれた。

ハロウイン

月日が過ぎて行くのは早い。
やつとのことで曲弦師と音使いを修めたと思つと、学校はハロウイン一色だ。

授業の始まる前のクラスは、ハロウインをどう過ごすかだつたり、夕食がどんなものができるかで盛り上がつていた。

僕はそんなことものく、たまにマイと話したり、ケロちゃんに会いに行つたり、魔法の練習したり、修行したりと、忙しくてそんなことを考える暇すらなかつた。

彼女も、勉強勉強で忙しくて朝話した時まで完全に忘れてたという。似た者同士だ。

それに、僕にとってハロウインは楽しい行事ではない。いつも「ちそがでていたが、僕が食べるのは余り物。暴食のダドリーがほとんど食べてしまつので残つてるのはダドリーの嫌いなものだけ。

ハリーも、同じようなものだ。

だから、僕はいつも1人最後の残飯処理。

普通の日の方がよっぽどましなご飯を食べられた。

そんな感じでハロウインといえば残飯だ。

それをマインに話すと、目に少し涙を浮かべながら「あなたも大変だつたのね」と言われた。

だから、「大変だつたよ。でも、もう戻る必要はないんだ。休みの期間でも漏れ鍋に泊まるから大丈夫だよ」と返す。

「もし良かつたら、私の家に遊びにこない？ お金だつてかかるでしょ？」

と、心配してくれた。

感謝感激。

友だちつていいものだな……と改めて感じた。

それはとにかく、今日の前にはこれでもかといわんばかりに贅沢に並べられた料理の数々。

魔法の演出も加わり、歓声が沸く。

こうして楽しい宴が始まった。

僕は、思う存分皿に好きなものをのせながら、隣の席のマルフォイや、他のことしゃべりながら食べる。

よく食べ、よく飲み、よく笑う。

その三拍子があると、時間はすぐに過ぎて行く。

けれど、

「トロールが……地下室に……お知らせしなくてはと思つて

と、クィレル先生が全速力で部屋に駆け込みながらダンブルドアに言つ。

ターバンはゆがみ、顔は恐怖で引きつっている。

クィレル先生は、あえぎあえぎ言い終わると、その場でぱたりと気を失つてしまつた。

その瞬間楽しかつた宴の席は大混乱。

ダンブルドア先生が杖の先から紫色の爆竹を何度も爆発させて、やつと静かにさせた。

けれど、その間にスネイプ先生が扉をでて走つていく。

どこにいくの！？

そう重い、糸を使いあとをつけた。

「監督生よ」

重々しいダンブルドア先生の声が轟く。

「すぐさま自分の寮に引率して寮に帰るよ！」

どうしたこと？

急展開に少し戸惑う。

先生は出て行って、トロールはでてくる。

よくわからない。

でも……先生がケロちゃんの部屋に入った！

『ケロちゃん、その人に何もしないで！』

糸電話の要領でケロちゃんに囁く。

『…………すまん。足を噛んでしまった。ジョンリーの連絡でとつさに弱めたから傷は深くないはずだ』

『ありがとう』

監督生に連れられるフリをして、先生の所に走る。

いつものように気付かれないうちに口笛を吹く。

そして、呼吸音で身体能力を上昇するようにリズムを刻む。

限界から解放された僕の筋肉はきしみながらも通常の早さを超える。

一分とかからずケロちゃんの部屋につく。

そこでは足を血まみれにしながら座る先生がいた。

「大丈夫ですか！？ 今治すんでおとなしくしていくださー」

そういって、ローブのポケットの中から小瓶を取り出す。この中には、アウリアの涙が入っている。

それを数的傷口にたらす。

そうすると見る見るうちに治る。

「ありがとう。ジユレニー。だが！」は危ない。三頭犬がまた襲つてくるかも知れん」

「大丈夫ですよ先生。ケロちゃんは友だちだから。そうだよね？」

「やうだな。すまんなジユレニーの友だとは知らなかつたもんで」

「…………」

ケロちゃんがしゃべるなんて思つてなかつたようだ言葉を失つている。

「じゃあ、先生を連れて行くね。騒がしてごめん」

「べつによい。ただ、先ほどハープを引きながら入ってきたやつがおつた。そのせいで眠つてしまつたが、臭い匂いがした。もしかしたら危険なやつかもしれん。気をつけろ」

「ありがとう」

そういうて、先生をつれて外に出る。
何か言いたそうな顔をしているが、

「ジョーリー、助かった。今のは何だ？」と聞きたいたがとりあえず
今は寮に戻れ。また明日、放課後私の部屋に来い」

「はい」

寮に向かって僕は歩き出した。

トロール 前編

「ビに行つたのよ、レミーは！？ いきなり消えたからケロちゃんに会いに行つた時と同じようこじたんだと思つけど……」

私ハーマイオニー・グレンジャーは女子トイレにいる。レミーがいなくなつて探しにいたら、ちょっとね。

どこかにまだトロールがいるかもしれないって言うのに、一人で行動するなんて前の私だつたら考えられなかつたわ。レミーといふと常識がことじとく壊されるからかな。それでも、人気のない所で一人でいるの心もとない。

全部レミーのせいなんだから！

言つてて思つけど理不尽な言い草よね。それでも、少しほ責任があると思つわ。私を心配させるなんて。

ズーン、ズーン

なに！？

もしかしてトロールの足音？
少しずつ大きくなつてる。
ビ、ビ、ビつしたらいいの。

レミー助けにきて！

..... そつ思ひても都合良へるわけがない。 わかつてゐなさぢ レリーなり。

淡い期待をしてしまう。

もうこいつちに来る！

そう思つた瞬間、扉がギギーと開き自分の3倍ほどの身長をしたトロールが立っていた。

口に立ってした

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ」

今までで一番大きな声で叫んだ。ケロちゃんを見たときより大きか

そして何よりそれから驚いたのは息が止れ悲鳴が出せなくなっていた刹那、トロールが細切れになつたからだ。

シユ一

「え！？」

間抜けな声を出し、腰を抜かしてしまった。

いくつもの腕や足だった部分が「ゴロ」「ロ」と転がっていく。

「大丈夫、マイ？」

ただ座り尽くしている私に声をかけてくるのはレニーだった。
助けて欲しいと願った相手。
ギリギリの所で助けてくれた。

話しの中の白馬に乗った騎士のようなタイミングで。でも、周りが血で染まり本人さえいないというのは……。

「聞こえてる?」

「え、ええ。大丈夫よ。目の前でいきなりトロールが細切れになつたんだけど」

「僕がやつたよ。今スネイプ先生を運び終わつた所。急いで行くからまつてね」

胸を撫で下ろす。

これでひとまず安心だわ。

誰かがこつちに走つてくる。
たぶんレミーだわ。

「…………ハーマイオニー、何があつたの?」

そういうて入つて来たのはポッターと、ウイーズリーだった。
一言も口をきかないと誓つた2人だつた…………。

トロール 前編（後書き）

今回、いつもよろしくさらに短くてすみません。

トロール 後編

「あなたたちに言つことなんて何もないわ。この光景見ていてわからないの？ トロールが細切れになつて死んでる。何を思つてあなたたちが来たかは知らないけど、良かつたわね。トロールが生きていくなくて」

「君がやつたの？」

「そんなわけないじゃない。私の知つている魔法にこんなのはないわ」

「じゃあ、だれが？」

「……知らないわよ。それよりも早く出て行つた方がいいわよ。もうすぐで先生が来るはずだから」

「君はどうするの？」

「私は残るわよ。じゃないと先生たちが困るじゃない」

「じゃあ一緒に残るよ」

「べつにいいわ。帰つてくれないと寮の点数も減点されるし」

「でもー！」

「うざー。」

なんでこいつて言つてるのに帰つてくれないの。

あんたたちが抜け出したのがばれたら、寮の点数が引かれるのよ。
私の場合は、目的があつたけど、あなたたちにはないはずでしょ?
あつたとしてもしょうもない理由に決まつてゐるわ。

早く迎えにきてくれないかな、レミー。

その刹那、1人の生徒が入つてくれる。
それも、街の中の車くらいのスピードで。
私たちとは違う、ローブの少年。
△△△
特徴的な赤毛の彼。

「大丈夫、マイ?」

「大丈夫よ」

「ここの2人はなんでここにいるの?」

「おい、兄に向けてその態度は何だよ。お前にそなんでここに来た
んだよ!」

「そんなの決まってるじゃん。マイが心配だからだよ」

「ふんつ! 生意気な。お前はこのトロールとあつたら倒せたって
言つのか? 僕にも無理なんだ。お前にできるはずないだろ?」

「え? 倒せないの?」

「何だよ! その自分は倒せますつて顔は!」

「実際僕、倒したから。そこにいるの僕がやつたから」

「どうやつたんだよー。」

「企業秘密」

「ふざけんなよー。」

レリー、やり過ぎ……じゃないね。
ここつ等なんかどうでもいいわ。
偉そうなやつなんて嫌い。

シーカーになつたからちやほやされてたから、浮かれてるんじ
やないの？

たぶん、レリーの方がすごいわ。

だつて私だつて知らない魔法ができるし、ケロちゃんと友だちだし。
いまさつきだつて、私をトロールから守つてくれた。

あなたが勝てる要素なんて一つもないわ。

「一体全体あなた方はどうこいつもつですか」

凛とした声が突然響く。

そこにはマクゴナガル先生と、スネイプ先生、クィレル先生がいた。

「殺されなかつたのは運がよかつた。でも、なんで死んでるんです
か！？ トロールですよ」

「マクゴナガル先生、これは僕がやりました。マイ、ハーマイオニ
？が危ないと知つたので、スネイプ先生に許可を貰つてきました」

「さうだミネルバ、ジョンリーに關しては吾輩が許可を出した

「あなたは教師でしょが！ 何故生徒を危ない所に送り込んだのですか！」

「私はけがをしている。そのとき助けてくれたのもジョンリーだった。だから、許可した。ジョンリーであれば心配ないと」

「…………わかりました。ジョンリー・ポッターはあなたの寮の生徒ですからね」

「ありがとうございます」

「ポッター、ウイーズリー、グレンジャーはどうしてもこのいるのです」

「私は、ジョンニーが列から抜けて行くのを見て危ないかもと後をおいました。その結果こう言つことになつたのは私の間違えでした。すみません」

「グレンジャー、あなたは賢い子です。今後はこう言つたことはないようにしなさい。罰則は後で言います。後、グリフィンドールの5点減点です」

「はい」

「僕たちはハーマイオニーが心配できました」

「そうですか。あなたたちも、後で罰則です。それにグリフィンドールからは10点減点」

「なんでジョン・レミーだけ何も無いんですか！？」

「彼がスリザリンだからです。私ではなく、セブルスが決めることです」

「チツ」

「けれど、セブルスとジョン・ポッターは校長室にきなさい」

「はい」

私は寮に戻る前に、浴場に行き血を洗い流す。
そうしないと寮の人気が驚くから。

大丈夫かな？
校長室なんて……。

まあ、レミーだから大丈夫かな。

ダンブルドア校長

以前来たことのある、校長室。

今回はスネイプ先生だけでなく、マクゴナガル先生、クイレル先生もいる。

マクゴナガル先生は僕のことを睨んでいる。
なんで？

僕悪いことしてないけどな。

クイレル先生はおどおどしているだけだし、臭いし、気持ちわるい。スネイプ先生はダンブルドア校長をじっと見ている。ダンブルドア校長は何か思案するようにひげを撫でる。けれど、その眼鏡を通した眼孔の先には僕を見ていた。

「今回のことじやが、トロールが逃げ出したのは我々に手落ちじやつた。けれど、何故そのトロールがあのよくな姿になつておつたか知りたいのじや」

「これは他言無用でお願いします。僕の技能に曲弦師といつのがあります、それは糸を操るといつものです」

「ほう。マグルの技術かのう？」

「わかりません。けれど、これは魔法使いに取つて相性の良いものではありません。例えば決闘をするとしましよう。杖を降る瞬間、糸で杖を切ればそれで負けは決定します」

「熟練したものでもか？」

「はい。見えないほど細い糸で始まる前から巻き付けていれば良い

のです。その後呪文を決めれば、簡単に勝てます

「ハハハ…………」

「それで今回は、校舎内に糸を巡らせてロールの場所を探し、切りました」

「探知も可能なのか？」

「はい。糸に触れるもので、だいたいわかります」

「どうでそれを覚えたのじや？」

「それは…………」

「言ひにくこのじやな。ならば今は聞かずにしてよ。そのかわりこれは今度から使うではないぞ」

「何故ですか？」
「これは僕の技術です。僕だけのものです。あなたに制限される覚えはありません」

「それでもじや。」
「これが他の魔法使いにばれたら殺されるかもしけんぞ」

「いえ、大丈夫です。それくらいならば1秒とかからず倒せますから」

「どうしてもか？」

「どうしてもです」

「ならば良い。だがくれぐれも人を殺すようなまねはするな」

「当たり前ですよ。やるとしても杖を壊すだけです」

「では、トロールの件だが、生徒に危険が迫っていたためしかたなく使つたといふことで良いか?」

「そうです。糸ではトロールの近くにハーマイオニーがいたので危険だと判断して殺しました」

「そうか。他の先生にはいのことは伏せておいつ。混乱を招きかねん」

「ありがとうございます」

「ただこれは公にできんが、教師がつくまえに友だちを勇敢にも倒したというのは1年生では間違えなくできんことじや。それで、寮の点数はやれんが何か望みはあるか? できる限り叶えよう」

「だったら、僕にも……いや、1年生にクイティッシュができるようにしてください。試験は受けます。ダメでしょうか?」

「今年からは無理じやが、来年からはじめるよつにしてみよつ。多少条件は厳しくなるがの。セブルス、ジョンニー・ポッターを寮のチームで臨時の試験を受けさせてみよ」

「わかりました」

「ありがとうございます」

マクゴナガル先生は涼しい顔をしている。
ハリーで勝てると思つてゐるからだろ？

ありえないよ。

ハリーより練習してゐる僕だし、才能だって上だよ。
他を知らないから、あんまり大きなこと言えないけど上級生には負けないくらいだ。

まあ、だからもうすぐあるクィディッチの試合で僕の見せてやる。

それにもしても、前の時はダメだったけど、力があるとわかつたら参考させるんだね。

ハリー以外の例外も作りたかったようだね。
でも、来年から1年生ができるといつても選抜試験で落ちるだろ？
けど。

まずは、このことマイに報告しなきやー！

スリザリン対グリフィンドール

11月になると、とても寒くなつた。

学校を囲む山々は灰色に凍り付き、湖は冷たい鋼のようになつていていた。

校庭には毎朝霜が降りた。

窓から見下ろすクィディッチの競技場は飛びのもばかられそなうなくらい冷えきつていた。

クィディッチ・シーズンの到来だ。

オーディションは今まで史上最高の成績を収め、チームとの連携などを練習した。

土曜日はいよいよ初試合だ。

スリザリン対グリフィンドール。

ハリーがシーカーをしているともっぱらの噂だ。

僕は、スリザリンの秘密兵器で誰にもばれていない。
まあ、マイは例外だけど。

前までのシーカー対策をしてある向ひには申し訳ないが、意味がない。

それに、僕の場合練習で、最速で1分、最長でも30分だ。

これは過去最高速だといつても過言ではないそうだ。

さらには、筹も借り物で二ンバス2000と比べれば7割の速さしかでない。

それでも結果がついてきているのは実力があるからだ。

11時には学校中がクィディッチの競技場の観客席に詰めかけてい

た。

双眼鏡をもつた生徒もたくさんいる。

観客席は空中高く設けられていたが、それでも試合の動きがみにくいいこともあるそうだった。

マイは寮的にはグリフィンドールを応援するそうだが、僕個人は別にして応援するみたいだ。

だから、朝食を食べ終わり用意をしに行く前には「絶対かつてくる」といつてきた。

更衣室でクイディッチようの緑色のロープに着替えて、大歓声に迎えられグラウンドにでた。

僕がいることに競技場全体が驚いていたが関係ない。

僕は僕のできること、仕事をするだけ。

箒を手に競技場の真ん中に立ち、糸を展開する。

刹那の速さでスニッチの場所を特定する。

「さあ、皆さん、正々堂々戦いましょう」

選手が周りに集まるのを待つて、審判のフーチ先生が声を出す。

何故か内のキャプテンについているような感じだったが気にしない。

なぜなら今回はそんな暇さえ『』えないのだ。

速攻で僕がスニッチをとる。

ただそれだけ。

それまでにできるだけ得点を稼ぐ。

といつもあることはあるが、僕が取ることが一番重要だ。

ふと目に入る、「ポッターを大統領に」の旗がつぎ。それを見て、興奮しているハリーはもつとつざつ。

だけど、気にしない。

これに勝つのに、そんなことは必要ない。

「よーい、箒に乗つて

」

銀の笛の高らかな音とともに、空へ舞い上がる。糸はその瞬間回収する。

試合中の使用は反則だからだ。

けれど、僕には場所がわかる。
羽音がするのだ。

その方向へ向かい飛べばいい。

だから、何も気にすることなく箒を一直線に飛ばす。

「さて、クアッフルはたちまちグリフィンドールのアン杰レーナ・ジョンソンが取りました なんてすばらしいチェイサーでしょう。その上魅力的であります」

羈縛な実況だ。

こんなのは聞きたくない。

だから、もつともつと加速する。

その間に横をブラッジャーが一瞬かすめるが、よける。

見えた！

金色の閃光がぐるぐると回っていた。

急加速をする。

そんな僕につられて気付いたのかハリーもスニッチを見つける。

けれど、僕の方が近い。

そして速い。

手を伸ばしながら 金色の閃光をつかみ取る。

開始5分。

魔法学校記録最速で初試合を終わらせた。

ホイッスルとともに試合終了だ。

けれど、グリフィンドールの選手は何があつたか理解できくなさそうだった。

開始5分で終わるクィディッチはしないそつだ。

でも、勝ち勝ち。

150対0。

まさに圧勝だった。

闇話 オカルモのロー（前編）

闇話といつりと短くなつてこます。

クイティッチの試合も終わり、興奮と、喜びは1ヶ月をめやすなかつた。

けれど、もうすぐクリスマス。

12月も半ばにもなると、ホグワーツは深い雪に覆われ、湖は力チコチに凍り付いていた。

そんな中僕の中を開めていたのは、クリスマス休暇だ。今まで忙しくて、外の森など探検にいけなかつたのをすまそうと思う。

アウリアを抱いて行けばあつたかいだろう。

けれど今はこの寒さが問題だ。

スネイプ先生の地下牢教室は、吐く息が白い霧のように立ち上がり、生徒たちはできるだけ熱いかまに近づいて暖をとる。

「かわいそうに」

魔法薬の授業の時、久々にマルフォイがハリーにちよつかいを出しへ行つている。

「家に帰るなといわれて、クリスマスなのにホグワーツに居残る子がいるんだね」

僕は自分の意志でここにいるので関係ない。でも、僕以上に可愛がられていたのに帰つてくるなといわれたハリーの心中は察しがつかない。

だぶん、お金がかかるとか戻つてくのは一回でいいとかそんな所だろう。

無視する、ハリーの顔は赤くなり今にも叫びたそうだったが授業中、しかもハリーの苦手とするスネイプ先生の授業だから我慢しているのだ。

なんか情けない……。

その中、マイは実家に帰るみたいだつた。
何か寂しくなる。

でも、アウリアを使って手紙は毎日やり取りすることが決まつてい
るので安心だ。

安心？

何だうひ……この気持ち。

離れると寂しくなつて、近づくと温かくなつて。

僕はこの気持ちの正体を知らない。

でも、マイも同じように感じてくれていたら嬉しいな。

關西 あるがの口二（前書き）

また短いですが、これからもよろしくお願ひします。

闇話 むぬ々の日2

ある日、クリスマスの休日を利用して禁じられた森へと行った。いつものようにすれば誰にもばれない。少しばかり奥に入ると動物の鳴き声が大きく聞こえるようになってしまった。

ここのはケンタウロスやゴーラーン、セストラルがいるしゃつだ。

そこで、気配を現して口笛を吹く。

ピコーと甲高い音とともに森が風で揺れる。

どこの方向からも多くの生物がじけりに起きているのがわかる。

「動くな！」

まず来たのはケンタウロスたちみたいだ。
その次にゴーラーン。

セストラル。

クモ。

などなど。

周りをざつと囲まれてしまった。

まあ、その分糸を張り巡らしているし、音で心もつかんでいる。
それに、そもそも襲いつような雰囲気をだしていない。

「やあ。僕はジョン・ポッター。みんなと友だちになりましたけど、いいかな？」

「それだけのためにこんな危ない所にきたのか？」

「そうだよ」

ケンタウロスは心配してくれるみたいだ。

「それより、あなたのお名前は？」

「わ、私か？」

「そう」

「私はシユバルツだ」

「よろしくね。…………それで、周りの子たちもいいかな？」

そういうて周りを見回すと始めにあつた少しの警戒もとけ、親しく述べようとする意思が伝わってきた。

「みんな、ありがとう。じゃあ、僕のお友達を紹介するね。不死鳥のアウリアと、白面金毛九尾の狐の二ーナちゃんだよ」

そういうて抱いていたアウリアとペンダントに住んでいた二ーナをみんなの前に出す。

「オー、これは珍しい。不死鳥に東方の有名な狐ではないか」

「そう？　この子たち可愛いけどそんなに珍しいなんて思わなかつたよ」

「たまにくるハグリットが言つておつたぞ」

「へー」

驚きの事実発覚。

必要の部屋の中で呼んだ時はそんなこと一言も言つてくれなかつたからな。

でも、なんとなくこのもふもふなしつぽはただ者じやないとは思つてたけど。

それから、みんなと夕飯で戻る時まで話した。

みんな個性的で面白かつたし、僕の知らないことをいっぱい知つてたから教わった。

これからもたまに行く約束をして帰る。

こんな休日の過いし方も悪くない。

ケロちゃんの歩むもの

「マイ、久しぶりだね」

「やうね。私からのプレゼントしつかり届いたかしら？」

「届いたよ。ありがとう。僕からは？」

「アウリアがしつかりもつてきてくれたわ。とっても高そうなペンダントだつたけどいいの？」

「それはね、クリスマス休暇中に行つた森でアクロマンチューラの子供にあつて、毒をわけてもらつたんだ。それを売つたら結構貰えてね」

「そ、そつな……」

「どうしたの？ 何かダメなことしたかな？」

「違うわ。ケロちゃんの時もそうだけど、あなたつて動物にすかれやすいのね。それも、ありえないのに」

「そうだね。森の中でも友だちがいつぱいできたから。アクロマンチューラ、アクラちゃんの親御さんはアラゴクつて言つみたいで、良くハグリットつて名前の人のこと話してくれるひじこよ」

「ハグリット…………。いつか危険なことあるんじゃないかなって思つてたけど、もうしてただなんて」

「大丈夫だよ。たぶん知ってる人も少ないはずだし」

「そうね」

ちょうどクリスマス休暇も終わり、マイが帰ってきたのでケロちゃんの所に向かっている。

クリスマスにはプレゼントを送っていた。

ペンドントだけど、ダイアゴン横町に行つてかつてきたものだ。アウリアを使えばすぐだつたしばられてないはず。

一番マイに似合いそうなやつを値段も見ないでかつたから、高くてびっくりした。

でも、アクラちゃんのおかげで大丈夫だつたし、マイに喜んでもらえて何よりだ。

マイからは虫歯になりにくいうにできている飴と本をくれた。本は『吟遊詩人ビードルの物語』だった。

マルフォイと前話していたときにこれの話を聞いて、読んでいいなら読んだらしいよとお勧めされたので読んでみたいなどマイに話したことがあった。

それを覚えていてくれたようだ。

そういうじてこりゅうちにケロちゃんの部屋につく。

「ひさしぶりー！」

「久しぶりだな、ジョンニー、ハーマイオニー」

「久しぶり、ケロちゃん」

「今日はどうでした?」

「いや、ちゅうど休暇も終わってマイが帰ってきたから来ただけ」

「せうか」

「マイはこつものかひて聞いたことでもあるの?」

「あるわよ」

「なんだ?」

「こつも氣になつてたんだけど、足下の扉つて何?」

「気付いていたのか!」

顔が3つ一瞬にして驚いた表情になるから渦わず吹いてしまつ。

「ヘルーのことはほつておいて、もしかしてスネイプ先生が前來たとき噉みついたのに關係あるわけ?」

「そうだ。ハグリットに賢者の石を守るために連れてこられた。べつに飯もしつかりてるから文句はないんだが、如何せんこには狭くていやになる」

「わうよね。あなたの身体に対しても部屋は狭いわね…………つて、違うわー。今賢者の石つて言つた?」

「言つたぞ。何でもダンブルドア先生の友人から預かつてゐるそつだ」

「「」の扉のなかって私たちで入れないの？」

「入れるぞ。ただ、この扉の後にもしかけがしてあるそうだから、危ないかもしけん。まあ、欲しくもないならいかなの方が多い」「

「ケロちゃん、マイ、僕欲しい。賢者の石ってどんなのか見てみたいんだけど」

「何言つてゐるの、ヘリバー？ わつきの話し聞いていたでしょ？」「危ないのよ」

「僕たちなら大丈夫だよ。ケロちゃん、もし僕たちがいくときは行かせてね」

「了解した」

マイがやれやれといった感じで手を頭に当てながら僕を見ていくる。まあ、いつものことだからいいよね？

こんなことがあり、マイと僕は一週間後に行く約束をした。

スネイプ先生には話しておいた方がいいかな？

まあ、とりあえず行く準備をしどかないと！

丁度1週間、僕たちは賢者の石を見に行くための準備に明け暮れた。何か役に立ちそうな薬品がないかと考え、できるだけ作り、マイは罠について考え対抗策を練つた。

僕の力があればたいていは乗り越えられるだろうと思つけど用心は必要だ。

マイが言つには先生一人ひとりによつて罠が仕掛けられているそうだ。

だから、スネイプ先生やマクゴナガル先生、ダンブルドア校長先生の罠もあるということになる。

たぶんどれも、魔法使いらしいものなのだろう。

たいていは糸で切れば解決できるという、裏技が僕にはあるがそれは想定外だろ。

力技なんて魔法使いがしなさそつな手法だ。

僕らはいつもの時間にグリフィンドール寮の前で待ち合せをして、薄暗い廊下を歩く。

靴の音と、僕の口笛。

それだけが響く。

誰にもばれることはない。

そういえば、ハリーも抜け出すことが多くなつたみたいで困っていたといつていたな。

誰からかわからないけど、透明マントが送られてきたそうだ。

マイの予想では、ダンブルドア先生みたいだ。

まあ、僕らには関係ない。

そんなのがなくとも、見えないものは見えなくなるのだ。

そうして、僕らは今冒険にでる。

「ケロちゃん、行ってくれよ

「行ってくれるわね」

「けがなさずするでなさい。あまつ心配せんでない

「わかつてゐよ。僕たちを誰だと思つてゐの？」

「「ケロちゃんの友だちでしょー」」

僕たちは扉を開け、アウリアの足をつかむ。

そこ見えないこの先に何が待つとこうのだろう。

それでも、知的探究心、興味は尽きない。

だから、僕たちは進む。

紅の羽を羽ばたかせて、少しづつ下りて行く。

手の持ったランプの光でそこを照らす。

何かに近づくにつれ、黒いのがはっきりわかる。

とつあえず、一メートルくらい上の所でとまる。

「これなんだと思つ?」

「何がで読んだことあるわ。これは植物よ。ナヘ、『悪魔の罠』ー。
ナヘいえば授業でやったね。スプラウト先生が書ひこな、暗闇と
湿氣を好むだつたはずだよ」

「じゃあ、あの呪文でいいわね? セーの

「「インセンティオー!」「

杖からでた、炎は『悪魔の罠』を燃やす。

自分たちの通る分だけ燃えると、アウリアが下に下りて行く。

そこには奥へと続く石の一木道があった。

アウリアを肩に乗せたまま、遠足気分で歩いて行く。
はつきり言えば、たつきの罠はたいしたことがなかつた。

歩くこと3分。

虫の歌とよつなものが聞こえてくる。

「聞こえてる?」

「ええ。金属の「かずかず」みたいだわ。それに羽音も

進んで行くと通路の出口である。

目の前にはまばゆく輝く部屋。

天井は高くアーチ型をしている。

宝石のよみにキラキラした無数の小鳥が部屋いっぱいに飛び回っていた。

部屋の向こう側には分厚い木の扉がある。

一応糸で鍵がかかってないかを確認する。
そうすると、案の定かかっていた。

「向うの扉は鍵がかかってるみたいだよ

「やつぱりそうなのね。見て！　あの鳥鍵の形をしているわ。たぶんどれかがあそこの鍵だから」

「ちょっと待つて」

糸で鍵の穴の形を確認。

そして、鳥の中で同じのがいかを確かめる。
何百もいる中でも僕の糸は問題ない。
究極に扱えるように、修行してきた。
曲弦師を極めた僕に不可能はない。
まあ、もっと上があるとは思うけど。

「あつた！　とりあえず、向うの扉の所まで行こう

「襲つてこないわよね？」

「大丈夫。僕が守るから」

僕らは手をつなぎ扉まで走る。

幸運なことに襲つてはこなかつた。

糸で田端での鳥をじちらに引き寄せ、さつと開ける。

その時も襲つてはこなかつた。

もしかしたら、部屋の真ん中にあつた簾が起動装置だつたのかもしれないな。

次の部屋は真っ暗だつたが、僕らが入ると明かりがともる。

そこに広がつたのは、大きなチエス盤だつた……。

大きなチェス盤の上には、チェスの駒が一列ずつ側面黒に向ひ側面白でのつている。

そのティスの駒は僕らよりも背が高いよつだった。

「マイ、これは僕らがチェスをするのかな？」

「わいわいだと思つわ

「わいきみたいに向ひの扉に行つてみる？」

「止めときましまひ。」こうの映画だと攻撃していくはずだから。それに異だからたぶん行つたらダメよ」「

「そつか。じやあわいを終わらせなひ

そうについてナイトの駒まで近づいて行く。
そして手で触れるとすぐにビードてくれた。
マイも同じようにして、ルークと変わる。

「これって魔法使いのチェスだよね？」

「それはそうでしょ

なら勝てる。

僕がナイトの代わりになるところとは全方位を攻撃できる駒になつたのと同義だ。

ここからは殲滅戦になる。

白いポーンがふたつ前に進む。
これがチョス開始の合図だ。

自分を前に進めながら、糸を展開。
全部の駒にくくりつける。

「マイ、セーので向うの扉まで走れ！」

「セーの！」

その掛け声とともに石のぐだける音が部屋に響く。
こんなのチヒスじゃないかもしけない。
でも、結果といてこの先に進めるんだから問題ない。
そう、問題ないんだ。

そつ思いながらも扉に向かつて走る。

「開かないわよ、レヒー。どうするのーー？」

「大丈夫！」

これも糸で切り刻む。

ざく切りにされた扉はあつけなく崩れる。

そしてまた通路にでる。

「レヒー、そつきのはずるくない？ あんな力技魔法使いにはでき
ないわ」

「そうかな？ 普通、こんなのもともに相手になんかしないよ。だ
って、まだまだ罠があるかもしれないんだよ。こんなのでマイがけ

がなんかしても困るし」

「ありがとう……。それより、今までの罷を考へると、次はクイレル先生かスネイプ先生の罷じやないかしら?」

「そうかな? クイレル先生の罷つて、前倒したトロールだと思つんだけど。だから、無しなんじやないかな?」

「それもそうね。じゃあ、スネイプ先生の罷か……」

「大丈夫だよ! 僕魔法薬学は必死に勉強したから」

「そんな簡単な罷じやないと思つんだけど。まあ、私がいるから大丈夫ね」

「そうだね!」

そういうながら次の部屋の扉の敷居をまたぐ。そうすると同時に、入り口で火が燃え上がる。ただの火ではない。

紫の炎だった。

同時に前方のドアの入り口にも黒い炎が上がる。

閉じ込められた!

まあ、力技を使えばでれるけど。

「ハリー、7つの瓶と羊皮紙があるわ。たぶんこれでいけるわね」

そう言つてマイは羊皮紙を手に読み始める。

「『前には危険 後ろは安全

君が見つけさえすれば 一つが君を救うだらう
別の一つで退却の 道が開ける

その人に 二つの瓶は イラクサ酒

残る三つは殺人者 列にまぎれて隠れてる

長々居たくないならば どれかを選んでみるがいい

君が選ぶのには役に立つ 四つのヒントを差し上げよう
まず第一のヒントだが どんなにぐるぐる隠れても

毒入り便のある場所は いつもイラクサ酒の左

第一のヒントは両端の 二つの瓶は種類が違う

君が前進したいのなら 二つのどちらも友ではない

第三のヒントは見た通り 七つの瓶は大きさが違う

小人も巨人もどちらにも 死の毒薬は入ってない

第四のヒントは双子の薬 ちょっと見た目は違つても
左端からに番田と 右端からに番田の 瓶の中身は同じ味』

マイはホーッと大きな溜め息をついた。

やつぱり、微笑んでいる。

「すごいわ！ これは魔法じゃなくて理論ね。パズルだわ。大魔法
使いといわれるような人でも、理論のかけらもない人がたくさんい
るのはしてるわね。そういう人はここで永久に行き止まりだわ」

「でも違うんだろう。僕の場合は力技ができるし、考えればわかる
と思つけど、マイにはもうわかつてんんだろう？」

「そ、う、よ。いちばん小さな瓶が前に進める。いちばん右端の丸い瓶
のが戻る薬。レミーが小さい瓶のを飲んで」

「いいの?」

「いいわよ。そのかわりしつかり持つてくれるのよ」
「了解ー。」

どうやらこの部屋が最後みたいだ。

ということは、ダンブルドア校長の仕掛けがあるところだ。たぶん、ひっかけ的なもの。

そう思いながら歩いて行く。

中央には、大きな鏡がある。

そこには、『わたしはあなたのかおではなくあなたの心のぞみをうつす』逆さに書いてある。

これはみぞの鏡だ。

いわゆるマジックアイテムの一つだ。

本には、その鏡に映るのは、心から願つものだという。

まあ書いてある通りだ。

では、どうしたらいい?

心から賢者の石が欲しいと願えばいい。

僕らの願い。

それは、賢者の石を生で見ること。

そう思い鏡の前に立つ。

そして映るのは僕とマイ。

僕の手の中には賢者の石が。

マイはそれを興味津々で身を乗り出しながら見ていく。

どちらも満足した顔だ。

あ、マイが抱きついてきた。

僕は「ことを願っているのか……。

そんなことより手の中を見てみると、賢者の石が収まっていた。
ふと手が重くなつたかと思うとあった。

何となくしかけがわかつた。

心から賢者の石が欲しいと思って鏡の前に立つことが条件だと思つ。後もう一つか二つ、ダンブルドア先生のことだからありそうだけど。これだけたら上級生ならいけるんじやないかな?

案外楽な冒険だった。

学校の先生の罷もたいしたものじやないね。

まあ、ともかくマイの所に帰るつ。

僕が賢者の石を取つたことで全ての罷が止まつたのかわからぬけど、やつをまで燃えていたこの部屋の入り口の火は消えていた。

駆け足で、マイの待つてゐるチヨスの部屋に急ぐ。

「マイ！ 取つてきたよ！」

「す、いわー わたしにも見せてー！」

僕らはこの部屋で1時間ほど賢者の石を眺めていた。

そして、上に戻ることにはいつも帰る時間になつていた。

「ケロちゃん、賢者の石ゲットしてきたよ」

「それはすごいな。ハグリットはこれを抜けられるのはダンブルドア先生くらいなもんとかいつてたぞ」

「そんなことないよ。あれだったら結構な人がいけるんじゃないかな？」

「いや、このわたしを超えて行くことがまず無理だな」

「そうだね」

とりあえず、賢者の石は僕が持つておくことになり、マイを寮に送つて自分の寮に戻った。

こうして、大冒険は終わったのだ。

翌日は授業をさぼってこれを使って色々研究し、金を作ったりとかなか楽しかった。

また、その翌日、その翌日と田は経つていつたが、賢者の石がなくなったことは学校では噂になつていよいようだった。

そんなわけで僕たちが未だ持つている。

命の水など色々作つて遊ぶのは楽しい。

こんな子供に使われていいのかと思ったが、ホグワーツにある時点で大丈夫だろう。

そつそり、僕とマイは付き合い始めたんだ。

賢者の石を見ているとマイが抱きついてきて、みぞの鏡と同じ状況になつた。

だから、大冒険も2人でしたし、この気持ちを今そのままにしておくことなんてできないから告白すると了承してくれたのだ。

マルフォイにだけ、それを話すと疲れたようなかおをしてお似合いだよと言つてくれた。

どうしてマルフォイが疲れてるのかな？

休んでた分の書き写したのんでたからか。

マルフォイっていいやつだな。

ありがとう。

ノーバート

賢者の石を取つてきてからまた幾日も経つた。

必要な部屋のことを教え、そこで魔法の練習を一緒にするようになつたし、賢者の石の部屋で使つた曲弦師と音使い、動物とはなせる能力について詳しく教えた。

マイはマグルの家庭だつたからこの技能について不思議になどと思つていなかつた。

マイも、魔法は便利な道具程度にしか思つてないよつて、あれば使つようだ。車も使えば、箒も使つ。

ケースバイケースと言つてたな。

ただ、どこで学んだか気になつてたみたいだし、楽器を出せる腕輪にも興味を示していた。

そこひ辺は僕もわからないので何とも言えなかつたけど。

そんなんある口、糸で面白いことがないかと探つているとハグリットの部屋に駆らしきものがあるのを知つた。

マイにそのことを伝えると、「じゃあ、会つに行きましょつー」と言われ、これからいくことになつた。

ただ、マイの話によると、ハリーたちも行くみたいなので、重ならないよつに行かなければならぬ。

だから、マイにアポイントメントを取つてもうり、ハリーたりより先に行けるよつになつた。

「なんの卵なんだろ?」

「案外ドリフトンじゃないかしら。前から欲しつて言つてたはずだけど」

「そうだね。ドリフトンだつたら面白いけど、産まれた後どうするのかな？」

「たぶん養えてないんじゃない？」

「ハグリットだったらあつえる」

「その時はあなたが貰つてあげれば?」

「やうだね。僕が貰つたなりこつでも念えるし、ハグリットも賛成してくれると思うよ」

「とつあえず、ハグリットに話してみましょ」

「つして、ハグリットの所に行つた。

そして、このことを聞いてみると案の定考えていないようだ、僕の方で預かるのに賛成してくれた。でも、飼える時まで飼いたいみたいで、その時が来たらフクロウで知らせると約束してくれた。

肝心の卵だが、とつても大きくてびっくりした。

今まで見たことのある卵なんて、魔法薬学に使うのか、鶏の卵くらいしかない。

それに比べると何倍だろ?つか?

比べるのもばからしいほど大きかった。

今の状態じゃ、田玉焼きは作れないだろ？ 作ったら一人で食べられるかな？

そのあと、『ひやつてこ』の卵を貰ったとかを聞きながらお茶をした。まつたりとした時間と魔法生物についてとても興味深かった。

ただ、貰った経緯がどんなにもなく座じてマメヒト後で話して会つことをひつそりと決める。

なぜなら、賭けの商品である。

取引禁止が少なからずある『リラゴン』の卵を『ひやつてこ』は手に入れただんだ？

それに、知らないやつがハグリットにあげるか？

好事家なら高い値段を出してでも買いたいと思うが。

それで詳しく聞くと、ケロちゃんの攻略方法を話したかもしれないと言っていた。

もしかして、賢者の石を狙つて？

マイの方を見ると同じ考えに至つていたよつて僕の方に顔を向けていた。

とつあえず、今日の所は帰ることになつたが不安だ。

あんな簡単に攻略できる所に何かが取りに入ろうとしているとなると。

まあ、賢者の石はアウリアに持たせてペンドントの中に入れているから見つけるのは不可能なはずなんだけど。

とつあえず、ケロちゃんに注意だけとかなきやと思つたのだった。

後日、ハグリットは1週間ほどノーバート、孵つたドラゴンのこと
を飼つてから僕に連絡をくれ、ペンダントの中に入つてもらつた。
まあ、そのとき

『わたしはメスよ！ オスの名前なんてつけないで！』

と言つたため、ノーベルタと改めて名前を付けることになつたのだ。

盗人

一年生もそろそろ終わろうかという頃、ダンブルドア先生が出張にてていた。

そして、その日を狙いケロちゃんのいる部屋に侵入を試みていたので、僕がすぐにスネイプ先生に連絡する。すぐに先生は他の先生も集めてその部屋に向かった。ダンブルドア先生にも連絡はしてある。5分もすれば戻れるそうなので安心だ。

まずは、侵入者が誰なのか。

それは クレイル先生だった。

スネイプ先生は前から目を付けていたそうだが、特に今回招集をかけてこなかつたこと、僕の糸による情報によるのが決定的となつた。まあ、そんなに慌てる必要なんてないのにというのが僕の意見だったが、その部屋に賢者の石がないことを知る人は誰もいないので黙つておく。

今回のことではれるかもしぬないが、とりあえず今は

それに、クレイル先生がマイを襲つたら一大事だ。

一応マイの近くには糸を何本も張り巡らせてるので大丈夫だとは思う。

念には念をだ。

順調に解決すると思ったその矢先、思わぬことが起きる。

なんと、ハリーとロンもその部屋に入つて行つてたのだった。

ケロちゃんがクレイルの侵入のまま、寝ていたこともあり入れたようだが悪魔の罠に引っかかつており重傷を負つていた。

そのせいで先生たちが大慌て。

スネイプ先生だけが冷静に奥の部屋まで行つた。

そして、そこにいたのは『例のあの人』だ。

ただ、その身体は弱り切つておりクレイル先生に憑依することや、ゴニーハーンの血を飲むことで生きながらえている何とも滑稽な姿だつた。

それを見た、先生は慌てに慌てたが、その態度は一片たりとも見せず賢者の石を取り出す手伝いをした。

もうすぐダンブルドア先生が知つていたから、信じていたからの行動だ。

取り出そうとする寸前、表れたダンブルドアにより『例のあの人』は逃げざる終えなかつた。

弱体化した身体では殺されることがわかつていたのだろう。

また、ダンブルドアも捕らえられなかつたのはそれだけ『例のあの人』が強い証拠なのだろう。

僕なら靈体であつても音でだつたらなんとかできる気がするけど。

こうして、事件は幕を閉じた。

余談だが、ハリーとロンは数日後には治りマクゴナガル先生の5時間の説教と罰則をうけることになる。

そして、明日がホグワーツの終業式。

マイの家にいく約束はもうしてあるし、マイの両親にも手紙を送つてある。

そう、僕らはもう両親に認められていた。

ダーズリー家が戸籍上の親になつていていたがつい先日このことをスネイプ先生に相談しに行くと、里親になつてくれることになり、このような結果になった。

先生はスリザリンの先生だが、べつにマグルとか純潔とかで人を見ない。

それは、お母さんに関係しているとは思うけど詳しきは知らない。

「彼女を大切にしろ」

と帰るとき一言だけくれた先生の姿は哀愁が感じられた。

あとマルフォイにも家に誘われていたが、今回は丁重に断らせてもらつた。

なぜならマイと過ごす時間が減るからだった。

まあ、今から予定を立てれば、来年は行けるだらうといふことで来年お邪魔することは決定している。

そうそう、賢者の石だが盗まれはクレイル元先生に盗まれはしなかつたがなかつたことをダンブルドア先生に気付かれた。

ただ、誰が盗んだかまではわかつておらず、田下捜索中だ。

先生たちが必死になつて探しているので今は名乗りだせずにいる。

だから、少し落ち着いた頃にこつそり戻しておこいつ。マイもそれには賛成だつたようだ。

学年度末パーティー

今日は学年度末のパーティーだ。

大広間は7年連続で寮対抗杯を獲得したお祝いに、グリーンとシルバーのスリザリン・カラーで飾られている。

スリザリンのヘビを書いた巨大な横断幕が、ハイテーブルの後ろの壁を覆っていた。

ラッキーなことに今日退院してきたハリーとロンの2人がおくれて広間に入つてくるとあたりはシーンとなる。

この2人が何をしようとしたのかは先生からは何も語られていない。けれど、噂というのはすごいもので誰が流したかもしれない馬鹿なことをやったというのはみんなが知っていた。

そして、次に表れたのはダンブルドア先生だ。

「また1年が過ぎた！一同かぶりつく前に、老いぼれの戯言をお聞き願おう。なんと言つて1年だつたろう。君たちの頭も以前に比べて少し何かが詰まつておれば言いのじやが……新学年を迎える前に君たちの頭が綺麗さっぱり空っぽになる夏休みがやってくる。

それではここで寮対抗杯の表彰を行うことになつてとる。点数は次の通りじゃ。

4位	グリフィンドール	262点
3位	ハーフルパフ	318点
2位	レイブンクロー	389点
1位	スリザリン	513点

となつておる

僕にテーブルは嵐のような歓声と足を踏み鳴らす音が上がる。

マルフォイヒグリットをならしたり、まわりに負けじと顔を出す。

「よし、よし、スリザリン。良くやった。しかし、つい最近の出来事も勘定に入れねばなるまい」

部屋全体がシーンとなつた。

スリザリン寮生の笑いが少し消える。

「えへん」

ダンブルドアが咳払いをする。

「駆け込みの点数をいくつか『えよ』。あと、もう少しう……まあ最初は、ロナルド・ウイーズリー君

ロンの顔がお赤くなる。

まるで日焼けした赤かぶれのようだ。

「この何年間かでまれに見る勇気をだしてくれたことによつて三十点

グリフィンドールの歓声は天井を吹き飛ばしかねないくらいだ。

「次にハリー・ポッター君……。ウイーズリー君と同じように二年近く年まれなる勇気を見せてくれたことをたたえ三十点。

また、勇氣にも色々ある。敵に立ち向かつて行くにも大いなる勇気がいる。しかし、味方の友人に立ち向かうためには同じくらいの勇氣が必要じや。そこで、ネビル・ロングボトム君に二十点

これで、80点追加され3位に上がる。

ただ、1位がスリザリンでなくなるわけではないし、ましてやグリ

フィンドールが万年4位な訳ではない。

「しかしじゃ、ここで悲しいことに校則を破つっていたものがある。そのものには減点が必要じゃ。ジョンレミー・ポッター。立ち入り禁止の四階の右側の廊下に行つておつた。それに、禁じられた森にも行つていた。また盗みも行つている。これらも含めスリザリンを100点減点じゃ」

一斉に全ての人気が僕の方を見てきた。

スリザリンの人から見れば僕はクィディッチを優勝に導いた人だ。それが、いきなり100点も減点させられることをしていたなど言われたら、驚くだろう。

いや、それだけじゃすまない。

けれど、言つてることは事実なのだ。

ただ、「とても痛い死に方をしたくない人は今年いっぱい4階の右側の廊下に入つてはならん」としかダンブルドア先生は言つていない。

痛い死に方もしなかつたし、逆に楽しかつたのだ。

ケロちゃんと友だちになれたのもあそこのおかげだし、マイと付き合えるようになったのもあそこのおかげだ。

だから、僕は何も言えない。

言つたとしても信じてもらえない。

「静かにするのじゃ

ブーリングをしていたスリザリンの生徒の声が止む。まだ、1位から落ち合たわけでもないからだ。

「そして、ハーマイオニー・グレンジャー。彼女は知識を求めるあまり道を少しばかり違えたようじゃ。そこで、グリフィンドールを

50点減点

ただでさえ、グリフィンドールに友だちのいないマイがグリフィンドールを落としてしまうことをすることは致命傷だ。マイの席を見ると顔を伏せてじっとしている。まわりは好奇の目と侮蔑の目を向ける。

止めろ！

そう叫びたかった。

けれど、僕たちはこの学年度末のパーティーを台無しにした1人だ。僕ら2人はただそこに座るだけで何もできることはなかつた。唯一言えるのはマルフォイとスネイプ先生だけが何かわかっているという目をしてくれていたのが救いだつた……。

このパーティーが終わるとマイと僕は逃げるよつにすぐ大広間をでた。

すると、ダンブルドア先生が目の前に現れる。

「校長室に来てもらつていいかの？」

「…………はい」

僕だけ前に来たことのある校長室の中に入る。
そこにはスネイプ先生もいた。

「さつそくじやが、ジェレミー、グレンジャーの2人のどちらかが賢者の石を持つてあるのじやう？」

「………… そうです。僕が持っています」

「何故じゃ？」

「あの罠をクリアしたからです」

「それは方法じゃろう？ 何故じゃ？」

「「賢者の石を見たかったからです！――」「

「はい？」

「それだけです。きっかけとしてはハーマイオニーが間違って入ってしまった部屋で三頭犬を見たのがそうでした。けれど、僕がその後三頭犬と友だちになつたのが悪かつたんです」

「友だちじやと？」

「はい。ケロちゃんと友だちになつてから扉の下に何が隠されているか聞いて、興味がわいたので取りに行きました。罠自体は簡単だつたんですけど」

「罠が簡単じやと？ いや、それならみぞの鏡を攻略できたのにも納得できるが…………。わかった。2人とももう良い。けれど、今後一切危険なまねはしてはならん。禁じられた森だってそうじや。あそこは危ない。何ができるかわからん」

「わかりますよ。あの森の子たちともお友達なんで」

「友だち、友だち言つてあるがそんな簡単になれるものではなかろ
う」

「わかりません。僕も生まれつき動物とはなせますし、相手もすぐ
なついてくれます。だから大丈夫です。禁じられた森に入る許可を
下さい」

「…………考えておこう」

僕の気迫に負けたのかそう返事してくれた。

横で聞いていたスネイプ先生は驚いたかおをしていた。

「とりあえず、2人は戻つてくれ。儂はとりあえず先生たちと話さ
なければならん」

「わかりました」

ダンブルドア先生だけが1人納得した感じで終わった。

結局僕たちがどうなるのかわからずじまい。

それに、なんで僕たちが持つてるつてばれたんだ?

そんなそぶり糸では感じられなかつたが。

それに、何故かハリーとロンに点数が増えたのは納得いかなかつた。
さつきは優勝できしたことやつ自分のことだけでいいっぱいだつた
が今考えてみるとおかしい。

ただ、勝手に入つていつて、けがしただけで得点なんだ。

僕はけがもせずに取つて、『例のあの人』から守つたんだぞ。

マイも同じ相当困惑している。

なんとも締まりの悪い学年度末のパーティーになってしまった。

学年度末パーティー（後書き）

これで賢者の石は終了となります。
次は秘密の部屋になります。

ハーマイオニーの家（前書き）

秘密の部屋編開始となります。

ハーマイオニーの家

あの締まりの悪い学年度末もあのまま、なあなあと終わってしまった夏休みに入った。

とりあえず、3日間は漏れ鍋を予約してあるのでそこに止まる。

そのあと、マイの家にいく。

しつかり者のマイのことなので、夏休みに入る前にフクロウで手紙を渡してあつた。

そのおかげで、娘が帰ってきて3日間で彼氏じゅうだいを迎えることができる。とつてもありがたいが、いいものなのだろうか？

友だちは友だちでもボーアフレンドだからな…………。

とりあえず、マグル育ちだから勝手が違うなんてことはないだろう。

そんなわけで、ドラゴンに乗つてマイの家に向かっている。

かなり上空を飛んでいるから見つかることはないと思つが、一応透明化の呪文を書けている。

心配なのはたまに通る飛行機だ。

ドラゴンもそれなりに速いは速いが、飛行機と比べると少しばかり劣る。

それは、人を乗せているからだ。

そんな速度で生身の人間が乗つていたら耐えれない。

一応魔法もあるにはあるが常時展開なので、少しでも集中力をなくしたら凍えて死んでしまう。

まあ、自家用飛行機（少し遅い）があるだけ一般のマグルから見れ

ばす”いだらうが。

20分ばかり飛ぶとマイの住む地域がみえてくる。
ここからはアウリアに変えておりていく。

アウリアを最初から使えば、暖炉でも行けないこともないのだが。
近代化した家には暖炉があることの方が珍しい。
それで、暖炉を使って行けないのだ。

他の魔法使いたちにとって、この辺の移動は少しばかり大変だろう。

そうこうしている間に、マイの家の前まで来る。
この時間はまだ歯科医をやっているようだ。
お昼休みの時まで外をぶらついておく。

マイの住んでいる場所となると、将来住む可能性のある場所だから
しっかり見とかなければならない。

それに、長い間ここでお世話になるのだから、地理の把握は基本だ。
大型のスーパー・マーケットやコンビニエンスストア、ハンバーガー^{シヨツプ}などなど。

大通りの方にすると一通りそろっている。

かなり便利な所だな。

それに、魔法使いがないのがいい。

魔法使いばかりだとハリーのことを聞かれたり、学校と同じだったりとストレスがたまるのだ。

こういう所での息抜きというのはすこく大事だと思つ。

とりあえず、マイの家の方にまた戻り、途中の公園による。

いくつかあるベンチに腰をかけ、自動販売機で買った冷え冷えの炭酸飲料を開ける。

プシュッ という炭酸の抜ける音と共に炭酸飲料特有の甘い匂いが漏れる。

昼食時に近い公園にはあまり人がいない。

けれど、子供たちは少ないながらも笑って遊んでいた。

それを見ながら飲む炭酸飲料はとても気持ちのいいものだった。

「だーれだ?」

そういうわれいきなり隠しをされる。

この近くで知っている人などマイくらいしかいない。

「マイだらう?」

「正解! 来てたなうじつして家にこないのよ」

「君のお父さんがまだ仕事をしているのに行つたらまずいかなって思つてね」

「そうね。私もボーイフレンドよつて紹介したいわ」

「じゃあ、今から行こうか。どうせ、わかつて聞いたんだらう?」

それに時間的にもちょうどいい

「へへ」

可愛らしく舌を出してながらマイティでキッとしてしまつのは仕方ないことだ。

なぜなら僕の彼女だからね。
かわいいかわいい彼女だからね。

こうして、僕はマイのうちに入つて行くのだった。

アーロン・グレンジャー

マイの家は表から見ると歯科医、裏からはビリーでもあるような家にみえた。

パターの練習ができるくらいの庭に、新車の入ったガレージ。散歩中に見た家と同じだ。

けれど違うといつたら手入れされている花だろうか。

庭の隅にあるそれはとても色鮮やかに、静かに咲いていた。

その美しさには目を奪われる。

それが恋人のうちの花だという、補正があるのかもしない。

ただ、それでも美しいと魅了させるこの花は、魔法のようだった。

玄関の扉を開け先にマイに入る。

「ただいまー」

「おかえり」

「おかえりなさい」

ハスキーボイスの男の人の声と、有名な歌手を思わせるような高く透き通った女人の声が中から聞こえる。

「紹介したい人がいるわ。レミー入って」

マイが僕を中へ通す。

そこにいたのはまだ十分に若いといえる男女2人が立っていた。

ああ、この人たちがマイのご両親なんだなと思う。

何故かこの人たちを見るとマイがこんなにも聰明で可愛らしく産ま

れてきたかがわかる。

だからこそ、しかり挨拶をしなければ。

「初めまして。ジョンニー・ポッターです。ハーマイオニーのボーアフレンドをやっています」

「あらあら、あなたがハーマニーのボーアフレンドなのね。とても凛々しさう」

「そうだな。それにハーマニーと回して聴いていたんだが」

「ありがとうございます」

「ジョンニー君、敬語なんて使わないでくれ。私たちもいつ家族じゃないか」

「わつですよ。ハーマニーからも同じあげなさい」

マイはいつもを向きながら少ししゃれやレヤレといった表情で僕を見ながら、「へー、こつも通りでここのこと。そんな感じまるの必要はないわ

「そうみたいだ」

マイの両親に向こう、話さうと思つが名前を聞いていなかつた。

「そういえばあなた、まだ私たちの名前を聞いてないわ。私はエリサです」

「私はアーロンだ。娘のことを頼むよ。それと、これからのことだが客間が空いているからそこを使ってくれて構わない。朝食、昼食、夕飯は家族全員で取るのが基本だから君もその時間は家にいるよ。何かあれば朝のうちに言つてもらえると助かるよ。それと、マイのことをしつかり頼むよ」

「はいー。」

「それじゃあ、ゆづくらしていくれ。私たちは仕事の用意があるからな。つもる話もあるだろ？ がそれはまた夜にでも」

「やつしましょー！」

そう言つて、アーロンさんは仕事場に行つてしまつた。

昼休みは長いと思つんだけど、たぶん娘のボーイフレンドが来たから思つ所があるんだろう。

こればかりは仕方ないだろ？

まあ、僕に親がないから全部想像でしかないんだけど。

そんな感じで、マイの両親との初対面は終わつた。

アーロン・グレンジャー（後書き）

本編の方にまだ入らないので、短い話しが多くなるかもしれません
が、これからもよろしくお願いします。

ダイアゴン横町再び（前書き）

投稿遅くなりすみません。

リアルの方が忙しく何も手を付けられていませんでした。

毎日更新は1~1月に入つてからになると思います。（あくまで予定です）

これからも読んでくださいと嬉しいです。

ダイアゴン横町再び

それから数週間が過ぎ、再びホグワーツに行く時期が近づいた。学校からのフクロウが今学期にいるものを書いた手紙を持ってきたのが、それを実感させる。

マイの両親は忙しく、少ししかはなせないことがおおかつたが、とても良い人柄をしており、人格者でもあった。しかしそんな中、休みをもうけてダイアゴン横町に連れて行ってくれることになる。

僕とマイはとっても嬉しかった。

初めて親というものができた気がして、家族のぬくもりってのいうのを言つんだなって。
だから、マイと付き合えることがとっても嬉しいし、グレンジャー家が大好きだ。

そんなことで、今フローリッシュ・アンド・ブロッサ書店にいる。

- 『基本呪文集（二学年用）』 ミランダ・ゴズホーク著
- 泣き妖怪バンシーとのナウな休日 ギルデロイ・ロックハート著
- グールお化けとのクールな散策 ギルデロイ・ロックハート著
- 鬼婆とのオツな休暇 ギルデロイ・ロックハート著
- トロールとのどろい旅 ギルデロイ・ロックハート著
- バンパイアとばつちり船旅 ギルデロイ・ロックハート著
- 狼男の大いなる山歩き ギルデロイ・ロックハート著
- 雪男とゆつくり一年 ギルデロイ・ロックハート著

「今回買つ本の内容どう思つ?」

「あきれてものもいえないくらい、ダメね」

「僕もそう思うよ。」人の書いている本は、まるで自分がやった
ような感じがして、うそんくさい」

「そうね。他の本と比べて優しすぎるくらいね。トロールと旅なん
てできるわけないわ。間違つてこん棒を振り下ろされておしまいじ
やないかしら」

「そうだね。お母さんも狼男とは知り合いで温厚な正確みたいだっ
たけど、『例外!』って大きく書いてあつたし」

「買つ価値ないね!...」

「でもさ、ホグワーツに行くなら買わなきゃいけないよ」

「どぶにお金を捨てたつもりで買つわ。お母さんとお父さんには申
し訳ないけど」

「仕方がないよ。僕も同じような気持ちさ。今学期が終わったらす
ぐに売らないかい?」

「それがいいわね。綺麗にしておけばいくらか戻つてくるだろ?か
ら」

そんなことを小声で話しながら、わざと買つ。

今日は残念ながら、ギルデロイ・ロックハートのサイン会が10分
後にあるからだ。

世間的には彼は人気みたいだから。

それに、お店の中にもそれ目当ての人が多いからね。

マイの分の本も僕のカバンに入れてお店の外に出る。

その途中、マルフォイらしき影を見たが、すぐにお店の中に入つたのでわからなかつた。

もうすぐしたら会えるんだから気にして仕方がない。

その後魔法薬の品で足りなくなつてるものや、魔法具などを見て回り、昼頃にはダイアゴン横町をでて町中で昼食にした。マグルの世界を4人で回つた。

魔法界よりも僕が知らないものが多く、買いたいものがいっぱいあり、それに気付いたグレンジャー夫妻が買ってくれた。

その時はマイが説明したりしてくれ、とっても有意義な日になつたと思う。

それから数日後、僕らは9と4分の3番線にいる。

汽車の中でも（前書き）

すみません。
毎日投稿は難しいです。
ちょいとづつ更新になりますがこれからもよろしくお願いします。

汽車の中で

「ユウ一の席が空いてるよ」

「やうみたいね。少し早くつきすぎたかしら」

「べつにやうでもないんぢやない? だつてちうまほら来始めてるし。遅れるよりは早い方がいいに決まってる。それに君のお父さんたちも病院の方を午後から開けないとけないんでしょ?」

「そうね……これから一年会えないって戀つと悲しいナビ、ユーハーといれるのは嬉しいし」

「ありがとう」

コンパートメントの外を通る足音はだんだんとひるむべくなり、話し声も聞こえてきた。

けれど、僕とマイの空間だけは静かでゆつたりとした時間が流れている。

僕たちは本を広げ頭の中で何度もとなく魔法を使いシミコレーションをする。

マイの家にいる時、魔法が使えないから練習ができるないわといつていたので、この方法を教えてあげた。

必要な部屋でなんどなく実際練習した僕だけど、イメージは大切だ。

呪文の思考詠唱もできる。

母さんのノートに、ダンブルドア先生が使っていると書いてあったのでやつてみたが1ヶ月しないうちにできた。
ぜひ、マイにも習得してもらいたい。

到着する十分前にロープに着替える。
もちろん1人づつ。

「べつに僕は一緒にいいんですけど。
マイが恥ずかしがつてね。」

「イッチ年生はこっちだぞー。イッチ年生はこっちに来ーい

特徴的なハグリッドの声が夜のホグワーツに響く。
ただ僕たちはもう一年生ではない。
だから、上級生の向かう方に歩いて行く。
ハグリッドにはまた挨拶に行くとは思つけど。

「この馬車に乗るみたいね」

「そう、マイが言う。
ただ馬車は馬車だが……馬が引いていない。
代わりにセストラルがつながれていた。」

「でも、馬がつながれてないわ。魔法で動いているのかしら?」

「違うよ。セストラルが引いてるんだよ。セストラルは、死を見た
ことがないと見れない生物だからね」

「そうなの……」

「でも、この子たちはいい子だから安心して乗って」

「わかったわ」

馬車に乗り込み、セストラルに声をかける。

『久しぶりだね』

『そうですね』

『元気にしてた?』

『はい。ハグリッドがいいえさを持つてきてくれるの』

『今日はよろしくね』

『まかせてください』

マイが奇妙な目で見てくる。

「このこと話してただけだから」

「あなたってす』』わね。セストラルとも会話できるなんて

「それほどでも……」

いつじて馬車は揺れながら進んで行く。
大きな大きな、ホグワーツに向けて。

ホグワーツにつくと、一年生を迎えるにあたり監督生から「対して気にするな。去年君たちが受けたようにすれば良い」と言われた。マイとは寮が違うのでこの入学式だけは一緒に楽しめない。寮が違うだけで、結構接点がなくなつたりもするのだ。

まあ、マルフォイがいるから話しあ手には困らないけがらいにけど。それでもまあ、スリザリンはいろいろとプライドがあつたりで大変だけど、根はいいやつが多いから少しずつでも友だちが増えるとは思つ。寮で浮いていたり、結構きつい。噂ではマイが結構そんな状態だと言つ。少し厳しいかもしだいけど、僕と付き合つてるのが問題なんだろう。

スリザリンとグリフィンドール。

この関係はとても悪い。

マクゴナガル先生と、スネイプ先生は対抗意識があるだけで仲はあまり悪くない。

でも、それが僕たち生徒に少なからず影響を与えていたし、大人が表面上争っていたら子供もまねする。だからといって助けられるのはマイくらいなんだけど。

まあその後は一年生が入ってきて、組分けをして、夕飯が一氣にでてきて驚いて、ハリーとウィーズリーがいなくてという感じだった。それからは、マイと授業の合間に図書館であつたりとか夜抜け出して話したりとかドンドン口は過ぎて行った。

その中で聞いた話しによると、ハリー・&ウイーズリーは汽車に乗り遅れて、丁度乗っていた車に乗ってきたそうだ。

そのときにマグルに見られるなどしてきつくしかられたとか。

スネイプ先生は退学にしようとしたらしいけど無理だつたとか。

マイはあんな奴ら早く辞めさせんべきよと怒つていた。

日頃の素行を見れば同意だ。

それと、まだあまり広がっていない噂だが『話す黒い日記』がいろいろな所を回つているというのがある。

使い方がわからず捨てるか、気持ち悪くて捨てるかが大半なのだが、捨てたはずがまたどこかに表れるのだ。

マイ曰くこの謎を解いてみせると、探ししている最中なのだと。

僕はこの手の噂はあまり興味がなかつたので、気が向いたら参加すること。

それにマイが入りで解きたそうだつたし。

僕はその間クイーディッチの練習だ。

今年も優勝したいからね。

糸は使わなくても、音でだいたい場所はわかるから、後はスピードかなつて。

とりあえず、頑張りますか！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1994v/>

ハリー・ポッターの弟は母親似

2011年11月26日19時56分発行